

何遜詩訳注（八）

はしがき

これまで『何遜集校注（修訂本）』（李伯齊校注 中華書局 二〇一〇。以下『校注』）を底本として、何遜詩の訳注を作成し、『中国学研究論集』に掲載してきたのだが、今回は諸般の事情から「訳注（八）」を『中国中世文学研究』に掲載させて頂くことになった。底本も『校注』が底本とする張溥本（『漢魏六朝百三集』本）に改めた。但し、作品の配列は『校注』に拠っている。何遜の文学について考察を加える上で有効だと思われるからである。本稿で取り上げるのは、

「九日侍宴樂游苑」
「南苑」
「苑中見美人」
「早朝車中聽望」
「入西塞示南府同僚」
「下直出谿辺望答虞丹徒教」
「增新曲相對聯句」

小川恒男

「照水聯句」
「折花聯句」
「揺扇聯句」
「正釵聯句」
「賦詠聯句」
「至大雷聯句」
「臨別聯句」

の十四首。建安王蕭偉の推薦により梁武帝蕭衍との謁見の機会を得た頃から安西安成王蕭秀に従い郢州に赴いた頃までに作られたと推定される作品群である。「入西塞示南府同僚」詩は、本来にこの時期に作られたのかどうか、もう少し検討が必要かと思われる。後半はすべて聯句となったが、これまでも「訳注（二）」で「范広州宅聯句」、「（四）」で「擬古三首聯句」、「往晋陵聯句」、「（七）」で「相送聯句」三首の訳注を作成してきた。

川合康三氏『中国の詩学』（研文出版 二〇二二）が「そして南斉・謝朓を中心とする聯句、梁・何遜を中心とする聯句など、数が増えていく。南朝文人の聯句は柏梁臺

聯句と形式が異なり、一人が四句を続けて作って次の作者に移る。押韻は隔句韻、それが一首を貫くかたちに定着する。」と指摘するように、何遜の詩作の中で聯句が占める割合は量的にも質的にも大きい。八首の内、「賦詠聯句」「至大雷聯句」「臨別聯句」の三首を除いた五首はいずれも若くて美しい女性を主人公とする、『玉台新詠』に収められた作品群と近接した内容が描かれる。残りの三首は旅の途中、聯句に参加した人たちがそれぞれの感慨を述べたり、別れの悲しみを詠ったりする。

訳注を作成するに当たり、

明・張紘『何水部集』(『四庫全書』本)

明・薛昶『何水部集』(『六朝詩集』本)

明・張燮『何記室集』(『漢魏六朝七十二家集』本)

などを用いて校勘を行った。

「九日侍宴樂游苑(九日樂游苑に侍宴す)」

【本文及び書き下し】

- 1 皇德無余讓 皇德 余讓無く
- 2 重規襲帝勲 重規 帝勲を襲ふ
- 3 垂衣化比屋 垂衣して比屋を化し
- 4 眷顧慎為君 眷顧して慎みて君と為る
- 5 翻飛悅有道 翻飛も有道を悦び
- 6 卉木荷平分 卉木も平分を荷ふ
- 7 宸襟動時予 宸襟 動きて時に予し
- 8 歳序属涼氛 歳序 涼氛に属す

- 5 空を飛ぶ鳥たちさえも道有ることを心から喜び
- 6 地に生える草木も均等に恩恵を蒙っております
- 7 天子様は季節に相応しい楽しみを楽しもうとお出ましになり
- 8 時はまさに涼やかな秋です
- 9 宮城では朝焼けが明るく輝き
- 10 エンジュにかかる明け方の霧が深々と漂っていました
- 11 陛下がお乗りになる輿の鈴が宮中で穏やかに鳴り響き
- 12 陛下のお車の鳳凰の羽が群臣を先導しました
- 13 「湛露」の曲が演奏される中、羽根飾りのついた杯は嬉しそうに飛び回り
- 14 「承雲」の曲が演奏されると、八八六十四人の踊り手が列を組んで舞います
- 15 陛下が居ます樂游苑では宴がいつ終わるともなく
- 16 美しい池を囲む風景は夕闇に次第に包まれていきます
- 17 葉がまばらになった樹木は秋風を受けて高いところの葉がひるがえり
- 18 冷たい川の流れは風に吹かれたところだけ小さく波立っています
- 19 晴れた空の下を進む車がめでたい気を連ね
- 20 めでたい氣にいっしょに染められた馬を操っています
- 21 遠くの建物に日が傾いていき
- 22 風が生じ雲が湧き上がります
- 23 幸運にも諸侯の服を身に着けることができ
- 24 陛下の恩徳をもちまして、朝政にあずかることもでき

- 9 城霞旦晃朗 城霞 旦に晃朗として
- 10 槐霧曉氤氲 槐霧 曉に氤氲たり
- 11 鸞輿和八襲 鸞輿 八襲に和し
- 12 鳳駕啓千群 鳳駕 千群を啓く
- 13 羽觴飲湛露 羽觴 「湛露」を飲ぶ
- 14 伶舞奏承雲 伶舞 「承雲」を奏す
- 15 禁林終宴晚 禁林 宴を終ふること晩く
- 16 華池物色曛 華池 物色 曛し
- 17 疏樹翻高葉 疏樹 高葉を翻し
- 18 寒流聚細文 寒流 細文を聚む
- 19 晴軒連瑞氣 晴軒 瑞氣を連ね
- 20 同惹御香芬 同に惹まりて香芬を御す
- 21 日斜迢遞宇 日は斜めなり 迢遞たる宇に
- 22 風起嵯峨雲 風は起る 嵯峨たる雲に
- 23 運偶參侯服 運偶 侯服に參り
- 24 恩洽廁朝聞 恩洽 朝聞に廁ふ
- 25 於焉藉多幸 焉に於いて多幸に藉り
- 26 歲暮仰遊汾 歲暮 遊汾を仰ぐ

【日本語訳】

- 1 陛下は前王朝から皇帝の恩徳を余すところなく譲られ
- 2 帝堯とも言うべき斉の和帝をびつたり重なり合うように踏襲されました
- 3 無為にしてすべての人々を教化し
- 4 自らを省みて慎重に君主におなりになりました

ました

25 分不相応な幸運のおかげで

26 年老いた我が身も陛下の行幸を仰ぎ見ることができたのです

【校勘】

- 『芸文類聚』四引勲・君・分・氛・氲・群・雲・曛・文九韻。『初学記』四引勲・分・氛・氲・曛・文・芬・汾八韻。『文苑英華』百七十三。『古詩紀』九十三。
- 0 「九日侍宴樂游苑」、『類聚』作「為西豊侯九日侍宴樂游苑」。『英華』作「九日侍宴」、注云「一有『樂游苑為西豊侯作』八字」。張紘本・薛本作「九日侍宴」。『詩紀』題下云「為西封侯作」、張溥本同。
- 1 「余」、『類聚』作「与」。
- 2 「襲」、『英華』作「習」、注云「一作『襲』」。張紘本・薛本作「入」。
- 3 「化」、張紘本・薛本作「封」。
- 4 「眷顧」、『類聚』作「眷領」、『英華』注云「一作『眷領』」、張燮本作「瞻顧」。
- 7 「宸」、『英華』注云「一作『神』」。
- 9 「旦」、『初学記』『英華』作「朝」、『英華』注云「一作『旦』」。
- 10 「霧」、張紘本・薛本作「靄」。「氲」、『初学記』『英華』作「霽」、『英華』注云「一作『氲』」。
- 11 「輿和」、『類聚』作「和馳」、『英華』注云「一作『和

馳』。「八襲」、張紘本作「六龍」。

12 「啓」、『英華』・薛本作「起」、『英華』注云「一作『啓』」。

13 「歛」、『類聚』『初学記』作「歌」。『英華』注云「一作『歌』」。

15 「宴晚」、『初学記』作「晚宴」。

18 「文」、『詩紀』作「紋」、『英華』注云「一作『紋』」。

20 「同」、『初学記』『英華』作「飛」。「晴軒」二句、『英華』在篇末。

21 「字」、『英華』作「雨」。

24 「聞」、張紘本・薛本作「文」。

25 「藉」、『英華』作「籍」。

【押韻】

「勲」「君」「分」「氛」「氤」「群」「雲」「曠」「文」「芬」「聞」「汾」、上平二十文韻。

【語釈】

0 九日侍宴樂遊苑

「九日侍宴」九月九日重陽節に、天子が主催する宴に陪席する。六朝詩には、

任昉「九日侍宴樂遊苑」詩（五言）

丘遲「九日侍宴樂遊苑」詩（四言）

沈約「九日侍宴樂遊苑」詩（四言）

劉苞「九日侍宴樂遊苑正陽堂」詩（五言）

梁簡文帝「九日侍皇太子樂遊苑」詩（四言）

一）に「斯乃伏犧氏之所以基皇德也。（斯れ乃ち伏犧氏の皇德を基づけし所以なり。）」。

「余讓」前王朝から譲り残された恩徳。六朝詩には他の用例は見当たらない。「讓徳」の語が『尚書』舜典に「舜讓於徳、弗嗣。（舜 徳に譲りて、嗣がず。）」と見えるが、こちらは徳のある人。『梁書』武帝本紀に「（中興二年三月）丙辰、齊帝禪位于梁王。（丙辰、齊帝位を梁王に禪る。）」とある。

「重規」ぴったり重なり合う。「重規量矩」の略。「規」はコンパス、「矩」は曲尺。齊・王思遠「皇太子積奠」詩に「乃聖乃神、重規量矩（乃ち聖 乃ち神、規を重ね矩を量ぬ）」。

「帝勲」ここは帝堯をいう。『尚書』堯典に「帝堯曰放勲。（帝堯 放勲と曰ふ。）」とあるのに基づき、ここは齊和帝を舜に禪讓した堯に、梁武帝を舜に擬える。

3 垂衣化比屋 4 眷顧慎為君

「垂衣」無為にして天下が治まった。「垂衣裳」の略。『易』繫辭伝下に「黄帝・堯・舜垂衣裳而天下治、蓋取諸乾坤。（黄帝・堯・舜 衣裳を垂れて 天下 治まり、蓋し諸れを乾坤に取るならん。）」とあるのに拠る。謝朓「永明樂」十首其二に「鴻名軼卷領、称首邁垂衣（鴻名 卷領に軼ぎ、称首 垂衣を邁ぐ）」。

「比屋」すべての人々。漢・王褒「四子講徳論」〔文選〕五十一）に「夫忠賢之臣、導主志、承君恵、盛徳而化

庾肩吾「九日侍宴樂遊苑応令」詩（五言）

といった作がある。【校勘】に示したように『類聚』は詩題を「為西豊侯九日侍宴樂遊苑」に作り、『英華』は「九日侍宴」に作り、注に「二有『樂遊苑為西豊侯作』八字。」とある。「西豊侯」は蕭正徳。梁武帝の弟、蕭宏の第三子、早くから武帝に跡継ぎとされていたが、

天監元（五〇二）年、昭明太子が立てられてから改めて西豊侯に封じられた。『南史』梁宗室上に（蕭正徳）天監初、封西豊侯、累遷吳郡太守。（天監の初め、西豊侯に封じられ、吳郡太守に累遷す。）とある。

「樂遊苑」建康の北にあった苑囿。宋・范曄に「樂遊苑詔」詩〔文選〕二十）があり、その題下の李善注は『丹陽郡図經』を引いて「樂遊苑、宮城北三里、晋時菓園也。（樂遊苑、宮城北三里、晋の時の菓園なり。）」という。また、『宋書』礼志三に「（晋）明帝太寧三年七月、始詔立北郊、未及建而帝崩。故成帝咸和八年正月追述前旨、於覆舟山南立之。（明帝の太寧三年七月、始めて詔して北郊に立てんとするも、未だ建つるに及ばずして 帝 崩ず。故に成帝の咸和八年正月 前旨を追述して、覆舟山の南に於いて之れを立つ。）」、同じく礼志一に「宋太祖以其地為樂遊苑。（宋の太祖 其の地を以て樂遊苑と為す。）」とある。

1 皇徳無余讓 2 重規襲帝勲

「皇徳」皇帝が身に備えた恩徳。班固「東都賦」〔文選〕

洪、天下安瀾、比屋可封。（夫れ忠賢の臣、主の志を導き、君の恵みを承け、盛徳を襲へて 化 洪に、天下 瀾を安かにし、屋を比べて封ずべし。）」とあり、李善注が引く『尚書大全』に「周民可比屋而封。（周の民屋を比べて封ずべし。）」とある。曹植「靈芝篇」に「戸有曾閔子、比屋皆仁賢（戸ごとに曾閔子有り、屋を比べて皆な仁賢）」。

「眷顧」気になって振り返る。瞻顧とも。陸雲「為顧彦先贈婦」四首其二〔文選〕二十五。『玉台』三）に「遠蒙眷顧言、銜恩非望始（遠く眷顧の言を蒙るも、恩を銜むこと 始めより望むに非ず）」とあり、李善注は『詩経』小雅・大東に「瞻言顧之、潜焉出涕（瞻みて言に之れを顧み、潜焉として涕を出す）」とあるのを引く。毛伝に「瞻、反顧也。（瞻、反顧なり。）」という。

「為君」理想の君主となる。『論語』子路に「為君難、為臣不易。（君為るは難く、臣為るは易からず。）」とある。

5 翺飛悦有道 6 卉木荷平分

「翺飛」飛ぶ様。『楚辞』九歌・東君に「翺飛兮翠曾、展詩兮會舞（翺飛し 翠 曾がり、詩を展ひ 舞ひを会はす）」とある。転じて鳥をいう。范雲「詠井」詩に「不甘未応竭、既涸断来翺（不甘未だ応に竭るべからざるに甘んぜず、既に涸るれば 来翺断たれん）」とある

〔有道〕公正な政治が行われていること。潘岳「閑居賦」に「有道吾不仕、無道吾不愚。（道有れども吾仕へず、道無きも吾愚かならず。）」とあり、李善注は『論語』衛靈公に「君子哉、蘧伯玉。邦有道則仕、邦無道則可卷而懷之。（君子なるかな、蘧伯玉。邦に道有れば則ち仕へ、邦に道無ければ則ち可卷きて之れを懐く。）」とあるのを引く。

「卉木」草や木、植物。曹攄「思友人」詩に「凜凜天氣清、落落卉木疎（凜凜として天氣は清く、落落として卉木は疎らなり）」とあり、李善注は『詩經』小雅・出車「春日遲遲、卉木萋萋（春日 遅遅たり、卉木 萋萋たり）」の毛伝を引いて「卉、草也。」とする。

「荷」恩恵を蒙る。潘岳「河陽県作」二首其二に「豈敢陋微官、但恐忝所荷（豈に敢へて微官を陋しとせんや、はづかし所荷を忝めんことを）」とある。

〔平分〕均等に分ける。『楚辞』九弁に「皇天平分四時兮、竊独悲此廩秋（皇天　四時を平分するも、竊かに独り此の廩秋を悲しむ）」とあり、謝惠連「三月三日曲水集」詩に「四時　平分を著し、三春　融燠ようよくを稟く」。

「宸襟」帝王の思い、考え、また帝王をいう。六朝詩には他の用例は見当たらない。「宸」は北極星の位置、転じて帝王がいる場所。謝朓「始出尚書省」詩に「宸景

「晃朗」明るい様。朝日の輝きを形容することが多い。

疊韻。潘岳「秋興賦」に「天晃朗以彌高兮、日悠陽而浸微。」（天 晃朗として以て彌いよ高く、日 悠陽として浸く微なり。）とあり、李善注に「晃朗、明貌。」と。また、郭璞「遊仙」詩十九首其七に「朱霞升東山、

朝日何晃朗（朱霞 東山に升起、朝日 何ぞ晃朗たる）。
「槐霧」エンジュにかかった朝靄。六朝詩には他の用例
は見当たらないが、「槐」は都の街路樹である。何遜「擬
輕薄篇」にも「長安九達上、青槐蔭道植（長安 九達
の上、青槐 道を蔭ひて植う）」。

「**氤氳**」花や葉の香りが盛んに漂う様。双声。沈約「芳樹」に「**氤氳**非一香、**参差**多異色（**氤氳**として一香に非ず、**参差**として多く色を異にす）」。

「鸞輿」 天子の乗り物。また天子を指す。晋・何劭「洛水阻王公志」 持こ「詳司吉旋、鸞輿整妥（詳司旋

るを告げ、鸞輿すい綏すいを整ふ」とあるが、六朝詩には他の用例は見当たらない。「鸞」は鈴。『春秋左氏伝』桓公二年に「錫・鸞・和・鈴、昭其声也。(錫・鸞・和・鈴は、其の声を昭らかにするなり。)」とあり、杜預注に「錫は馬額に在り、鸞は鑣くわに在り、和は衡くひきに在り、鈴は旂はたに在り、動けば皆な鳴声有り。」

〔和〕調和する。天子の乗輿の鈴が宮殿に鳴り響く。

「八襲」八重に同じ。天子の宮殿をいう。張協「七命」

厭照臨、昏風淪繼體（宸景 照臨を厭ひ、昏風 繼體を淪む）」とあり、李善注は「宸、北辰、以喻帝位也。（宸は、北辰、以て帝位を喩ふるなり。）」とする。「襟」はえり、胸の中の思いをいう。張華「情詩」五首其三に「襟懷擁靈景、輕衾覆空牀（襟懷に靈景を擁するも、輕衾は空牀を覆ふ）」。

「時予」季節ごとの楽しみ。顔延之「秋胡行」九章たのに「春來無時予、秋至恒早寒（春來たるも時に予しむこと無く、秋至れば恒に早く寒し）」とあり、李善注は『爾雅』釈詁に「…、予、…、樂也。」とあるのを引く。

歳序あひだ 暄あたたかかに、軽雲 東岑に出づ」とある。

涼氣」秋の爽やかな雲氣。転じて秋をいう。少し後に
なるが梁・蕭曄「奉和太子秋晚」詩に「涼氣散簾席、
露色変林叢（涼氣 簾席に散り、露色 林叢に変わる）」。

城霞起、青如松霧澈（赤きこと 城霞の起こるが如く、
青きこと 松霧の澈きが如し）」。

「旦々、…曉…」明け方の様子を描く対句に用いる。沈約「悲哉行」に「徐光旦垂彩、和露曉凝津（徐光旦に彩を垂れ、和露 曉に津に凝る）」。

八首其三（『文選』三十五）に「応門八襲、璇台九重。

（応門は八襲、琤台は九重。」。

「鳳駕」天子の乗り物。また天子を指す。『漢書』揚雄伝上に引く「河東賦」に「乃撫翠鳳之駕、六先景之乗。（乃ち翠鳳の駕を撫し、先景の乗を六にす。）」とあり、顔師古注に「翠鳳之駕、天子所乗車、為鳳形而飾以翠羽也。（翠鳳の駕は、天子の乗る所の車、鳳形を為して飾るに翠羽を以てするなり。）」という。

「啓」教え導く。ここは「千群」の先頭に立って出発する。

「千群」臣下たちの多くのグループ。三国魏・陳琳「為袁紹檄序州」(『文選』四十四)に「長戟百万、胡騎千群、奮中黃育獲之士、聘良弓勁弩之勢。(長戟は百万、胡騎は千群、中黃 育獲の士を奮ひ、良弓 勁弩の勢ひを聘す。)」と見えるが、何遜以前の詩には用例が見当たらない。

さかづき。羽を広げたスズメの形としていると

も、鳥の羽を挿したとも。劉楨「贈五中郎將」詩四首其一に「金疊含甘醴、羽觴行無方（金疊は甘醴を含み、羽觴は行りて方無し）」とあり、李善注は『楚辞』招魂に「瑶漿蜜勺、実羽觴些（瑶漿、蜜を勺し、羽觴に実たす）」とあるのを引く。その王逸注に「羽、翠羽なり。觴、觚也。（羽、翠羽なり。觴、觚なり。）」と

あり、洪興祖補注は「杯上綴羽、以速飲也。一云作生爵形、実曰觴、虚曰罍。（杯上に羽を綴りて、以て飲むを速やかにするなり。一に云ふ 生爵の形を作し、実ちたるを觴を曰ひ、虚しきを罍と曰ふと。）」とする。「湛露」『詩経』小雅の篇名。『春秋左氏伝』文公四年に「昔諸侯朝正於王、王宴樂之、於是乎賦『湛露』。則天子当陽、諸侯用命也。（昔 諸侯 正に王に朝すれば、王 之れを宴樂し、是に於いてか 『湛露』を賦す。則ち天子 陽に当たりて、諸侯 命を用ふるなり。）」とあることから、君主の恩沢を喩える。

「佾舞」列をなして舞う踊り。ここは天子の舞楽である八佾舞をいう。『論語』八佾に「孔子謂季氏、『八佾舞於庭、是可忍也、孰不可忍也』。（孔子 季氏を謂ふ、『八佾 庭に舞はしむ、是れ忍ぶべくんば、孰れをか忍ぶべからざらん』と。）」とあり、『集解』は馬融の説を引き「佾、列也。天子八佾、諸侯六、卿大夫四、士二。八人為列、八八六十四人。（佾は、列なり。天子は八佾、諸侯は六、卿大夫は四、士は二。八人を列と為し、八八 六十四人なり。）」とする。

「承雲」黃帝の楽曲。『楚辭』遠遊に「張『咸池』奏『承雲』兮、二女御『九韶』歌『咸池』を張り『承雲』を奏し、二女 御りて 『九韶』 歌ふ」とあり、王逸注に「『承雲』即『雲門』、黃帝樂也。（『承雲』は即ち『雲門』、黃帝の樂なり。）」。

蛙黽は華池に遊ぶ」とあり、王逸注に「華池、芳華之池也。（華池、芳華の池なり。）」また曹丕「善哉行」に「朝遊高台觀、夕宴華池陰（朝に高台の觀に遊び、夕に華池の陰に宴す）」。

「物色」景色、眺め。顏延之「秋胡行」九章其七に「日暮行采芣、物色桑榆時（日 暮れて 行ゆく采りて帰らん、物色 桑榆の時）」とあり、李善注は「物色桑榆、言日晚也。（物色桑榆は、日の晩るるを言ふなり。）」という。

「曠」日が暮れて暗くなる。任昉「泛長溪」詩に「長泛滄浪水、平明至曠黑（長に滄浪の水に泛かび、平明より曠黑に至る）」。

17 疏樹翻高葉 18 寒流聚細文

「疏樹」葉がまばらになった樹木。用例の多い語ではなく、他には梁・庾肩吾「侍宴応令」詩に「清池写飛閣、疏樹出龍樓（清池 飛閣を写し、疏樹 龍樓を出づ）」と見えるだけである。

「翻高葉」高いところにある葉を風がひるがえす。「翻葉」は王融「採菱曲」に「騰声翻葉靜、發響谷雲浮（声を騰ぐ 翻葉の静かなるに、響きを発す 谷雲の浮かびたるに）」とあり、「高葉」は何遜以前の六朝詩には用例が見当たらず、陳・祖孫登「詠柳」詩に「高葉臨胡塞、長枝払漢宮（高葉 胡塞に臨み、長枝 漢宮を払ふ）」。「寒流」秋や冬の冷たい水の流れ。謝朓「始出尚書省」

15 禁林終宴晚 16 華池物色曠

「禁林」天子の庭園。ここは樂游苑。班固「西都賦」に「毛群内闐、飛羽上覆。接翼側足、集禁林而屯聚。（毛群 内に闐ち、飛羽 上に覆ふ。翼を接して足を側て、禁林に集まりて屯聚す。）」とあり、謝朓「侍宴華光殿曲水奉勅為皇太子作」詩九章其七「高殿弘敞、禁林稠密（高殿 弘敞たり、禁林 稠密たり）」。

「終宴」うたげを終える。曹植「公讌」詩に「公子敬愛客、終宴不知疲（公子 客を敬愛し、宴を終ふるまで疲るるを知らず）」。

「華池」ここは樂游苑内の池をいう。「華池」の語には二通りの解釈が見られる。ひとつは崑崙山にあったとされる神話中の池の名。晋・孫綽「遊天台山賦」（『文選』十一）に「挹以玄玉之膏、漱以華池之泉。（挹むに玄玉の膏を以てし、漱ぐに華池の泉を以てす。）」とあり、李善は『史記』に「崑崙其上有華池。」とあるのを引くが不詳。『論衡』談天に「太史公曰、『禹本紀言、（河出崑崙、其高三千五百余里、日月所相辟隱為光明也。：其上有玉泉・華池。：）』（太史公 曰く、『禹本紀に言ふ、（河 崑崙より出で、其の高さ三千五百余里、日月の相ひ辟隱して光明と為る所なり。其の上に玉泉・華池有り。：）』。『史記』本文に異同があったのか、李善の記憶違いか、よく分からない。もうひとつの解釈は、眺めの美しい池。『楚辭』七諫・謬諫（東方朔）に「鷄鶩滿堂壇兮、蛙黽游乎華池（鷄鶩は堂壇に満ち、

詩に「邑里向疏蕪、寒流自清泚（邑里 疏蕪に向んとし、寒流 自ら清泚なり）」。

「細文」精緻な模様。ここは細やかな波紋。用例の多い語ではなく、北周・庾信「夜聽搗衣」詩に「花鬢醉眼纈、龍子細文紅（花鬢 醉眼 纈し、龍子 細文 紅なり）」と見えるくらい。

19 晴軒連瑞氣 20 同惹御香芬

「晴軒」晴れた空の下を走る車。杜甫「憶幼子」詩に「憶渠愁只睡、炙背俯晴軒（渠を憶ひ愁へて只だ睡り、背を炙りて晴軒に俯す）」とあるが、ここは詩意から推した。「軒」は貴人が乗る車。佐伯雅宣氏「何遜詩訳注（一）」（『中国古典文学研究』第十三号 二〇一六）に既に指摘がある。

「瑞氣」めでたい気。太平の世であることの証し。梁詩以前には用例が見当たらない。『晋書』天文志中に「瑞氣、一曰慶雲。若煙非煙、若雲非雲、郁郁紛紛、蕭索輪困、是謂慶雲、亦曰景雲。此喜氣也、太平之応。（瑞氣、一に慶雲と曰ふ。煙の若きも煙に非ず、若雲の若きも雲に非ず、郁郁紛紛として、蕭索輪困たり、是れを慶雲と謂ひ、亦た景雲と曰ふ。此れ喜氣なり、太平の応なり。）」とあり、庾肩吾「侍宴」詩に「仁風開美景、瑞氣動非煙（仁風 美景を開き、瑞氣 動非煙を動かす）」。

「惹」染まる、染める。六朝詩には他の用例は見当たらず

ない。

「御」馬車を操る。二句、読み難いが、「晴軒」との繋がりから、瑞気の香りに染まった馬を御す、と解した。「香芬」よい香り。宋・湯惠休「楚明妃曲」に「香芬幽藹、珠彩珍榮（香芬 幽藹として、珠彩 珍榮たり）」と見える他はあまり用例がない。

21 日斜逶迤 22 風起嵯峨雲

「日斜」日が傾く。賈誼「鵬鳥賦」に「庚子日斜兮、鵬集予舍。（庚子 日 斜めにして、鵬 予が舍に集まる。）」とあり、晋・楊苕華「贈竺度」詩に「川上有余吟、日斜思鼓缶（川上に余吟有り、日 斜めにして缶を鼓せんことを思ふ）」。

「逶迤」遙か遠い様。双声。謝靈運「田南樹園激流植援」詩（『文選』三十）に「靡迤趣下田、逶迤瞰高峰（靡迤として下田に趣き、逶迤として高峰を瞰る）」とある。「宇」家屋のひさし、のき。

「嵯峨」雲が盛んな様。疊韻。陸機「前緩声歌」（『文選』二十八）に「長風万里举、慶雲鬱嵯峨（長風 万里より举がり、慶雲 鬱として嵯峨たり）」。

23 運偶參侯服 24 恩洽廁朝聞

「運偶」幸運にも。任昉「為褚諮議蔡謨代兄襲封表」に「臣世属啓聖、運偶時来。（臣 世よ啓聖を属み、運偶 時に来たる。）」とあるが、六朝詩には他の用例は

見当たらない。

「侯服」諸侯が身に着ける衣服。転じてそのような身分。「漢書」叙伝下に「偁上并下、荒殖其貨。侯服玉食、敗俗傷化。（上に偁り下を并せ、荒いに其の貨を殖やす。侯服玉食して、俗を敗り化を傷なふ。）」と見えるが、六朝詩には他の用例は見当たらない。

「恩洽」天子の恩愛。「洽」は水がしみこむように広いきわたる。語は漢・楊雄「長楊賦」（『文選』九）に「蓋聞聖主之養民也、仁霑而恩洽、動不為身。（蓋し聞く聖主の民を養ふや、仁 霑ひて 恩 洽く、動くに身の為にせずと。）」。

「朝聞」「朝聴」と同じく、朝廷に於いて天子が臣下の言葉に耳を傾ける。ここは、そのような場である朝廷をいう。謝莊「侍東耕」詩に「肅鑣奉晨發、恭帶廁朝聞（肅鑣 晨發に奉じ、恭帶 朝聞に廁はる）」とある。「廁」は身を置く。

25 於焉藉多幸 26 歲暮仰遊汾

「於焉」そこで。於是に同じ。「詩經」小雅・白駒に「所謂伊人、於焉逍遙（所謂 伊の人、焉に於いて逍遙す）」とあり、沈約「鍾山詩応西陽王教」（『文選』二十二）に「於焉仰鑣駕、歲暮以為期（焉に於いて鑣駕を仰ぎ、歲暮 以て期と為さん）」。

「多幸」思いがけない幸運。顏延之「和謝監靈運」詩（『文選』二十六）に「伊昔遘多幸、秉筆侍兩闥（伊れ昔

多幸に遘ひ、筆を乗りて兩闥に侍す）」とあり、李善注は『春秋左氏伝』宣公十六年に「善人在上、則国無幸民。諺曰、『民之多幸、国之不幸也』。（善人 上に在れば、則ち国に幸民無し。諺に曰く、『民の多幸は、国の不幸なり』と。）」とあるのを引く。

「歲暮」晩年。張協「詠史」詩（『文選』二十一）に「揮金樂當年、歲暮不留儲（金を揮ひて当年を楽しみ、歲暮 儲へを留めず）」とあり、李善注は「歲暮、喻年老也。（歲暮、年の老いるを喻ふるなり。）」とする。また、年の暮れ。「古詩十九首」其十二に「四時更變化、歲暮一何速（四時 更ごも変化し、歲暮 一に何ぞ速やかなる）」とあり、李善注は『詩經』小雅・小明に「曷云其還、歲聿云暮（曷か云に其れ還らん、歲 聿に云に暮る）」とあるのを引く。

「遊汾」俗塵を離れた地に遊ぶ。ここは天子の楽遊苑への行幸をいう。謝靈運「從遊京口北固山記」詩（『文選』二十二）に「昔聞汾水游、今見塵外鑣（昔 聞く 汾水の游、今 見る 塵外の鑣）」とあり、李善注は『莊子』逍遙遊に「堯治天下之民、平海內之政、往見四子藐姑射之山、汾水之陽、窅然喪其天下焉。（堯 天下の民を治め、海内の政を平らげ、往きて四子を藐姑射の山・汾水の陽に見て窅然として其の天下を喪る。）」とあるのを引く。汾水は堯が都したという山西省平陽の近くを流れる川。

「南苑」

【本文及び書き下し】

- 1 花門關千扇 花門 千扇關き
- 2 苑戸開万扉 苑戸 万扉開く
- 3 樓殿聞珠履 樓殿に珠履を聞き
- 4 竹樹隔羅衣 竹樹 羅衣を隔つ

【日本語訳】

- 1 南苑の彩り鮮やかな出入口では千の扉が開かれ
- 2 苑内の建物では万の扉が開かれている
- 3 宮殿の階上からくつに飾った真珠の音が聞こえ
- 4 竹林の向こう側からは薄絹の衣裳の衣擦れの音が聞こえてくる

【校勘】

○『玉台新詠』十。『古詩紀』九十四。

0 「南苑」、『詩紀』・薛本作「苑中」。張紘本作「苑中絶句」。

1 「花」、『玉台』『詩紀』・張紘本・薛本作「苑」。「關」、張紘本・薛本作「閉」。

3 「聞」、『玉台』作「間」、注云「一作『聞』」。

【押韻】

「扉」「衣」、上平八微韻。

【語釈】

〇南苑

「南苑」建康にあった庭園。瓦官寺の東北、いま城内の西南隅にあった。遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局 一九八三）に拠り、六朝詩中から「南苑」の語が現れる作品を抽出すると、

宋・鮑照「三日遊南苑」詩

採蘋及華月 蘋を採りて華月に及び
追節逐芳雲 節を追ひて芳雲を逐ふ
騰薜溢林疏 騰薜 林の疏らなるに溢れ
麗日曄山文 麗日 山の文あるに曄く
清潭円翠会 清潭 翠会に円く
花薄縁綺紋 花薄 綺紋に縁る
合樽遽景斜 樽を合はせれば遽かに景 斜めに
折采舂組芬 采を折りて組芬を舂しむ

梁・何思澄「南苑逢美人」詩（『玉台』六）

洛浦疑迴雪 洛浦にては迴雪かと疑ひ
巫山似旦雲 巫山にては旦雲に似る
傾城今始見 傾城 今 始めて見
傾国昔曾聞 傾国 昔 曾て聞く
媚眼隨羞合 媚眼 羞に隨ひて合し
丹唇逐笑分 丹唇 笑を逐ひて分かる
（羞、『玉台』作「嬌」）

風捲蒲萄帶 風は蒲萄の帶を捲き
日照石榴裙 日は石榴の裙を照らす
自有狂夫在 自ら狂夫の在る有り
空持勞使君 空しく持して使君を勞せしむ

梁・庾肩吾「南苑看人還」詩（『玉台』八作「南苑還看人」）

春花競玉顏 春花 玉顔と競ひ
俱折復俱攀 俱に折り復た俱に攀づ
細腰宜窄衣 細腰 窄衣に宜しく
長釵巧挾鬢 長釵 巧みに鬢に挾む
洛橋初度燭 洛橋 初めて燭度り
青門欲上関 青門 関を上さんと欲す
中人応有望 中人 応に望む有るなるべし
上客莫前還 上客 莫前に還れ

梁・鮑泉「南苑看遊者」詩（『玉台』八）

洛陽小苑地 洛陽 小苑の地
車馬盛經過 車馬 盛んに經過す
綠溝駐行幘 溝に縁りて行幘を駐め
傍柳軋鳴珂 柳に傍ひて鳴珂を軋ず
履高含響佩 履 高くして 響佩を含み
襪輕半隱羅 襪 輕くして 半ば羅に隱る
浮雲無処所 浮雲 処所無ければ
何用軋橫波 何ぞ用ひん 橫波を軋ずるを

と、鮑照の例が非常に早いのを除けば、いずれも梁代の詩人の作であり、『玉台新詠』に収められ、「逢」「看」のように苑内で美しい女性を目にしたことを描く。鈴木虎雄『玉台新詠（下）』（岩波書店 一九五六）が何遜「南苑」詩を

「義解」お苑の門には千の門扉がひらかれてゐる。お苑にある建物の戸は万の扉がひらかれてゐる。二階だての御殿には珠をかざった履をふむ音が聞こえる。し、竹や樹木のすきまからはうすぎぬの姿がみえる。（傍点、訳注者）

と解しているのも『玉台新詠』に限ってみれば首肯できるものだと思う。

1花門關千扇 2苑戸開万扉

「花門」彩り鮮やかな出入口。六朝詩には他の用例は見当たらない。「苑門」であれば、班固「西都賦」に「於是乘鑾輿、備法駕、帥群臣、披飛廉、入苑門。（是に於いて鑾輿に乗り、法駕を備へ、群臣を帥み、飛廉を披きて、苑門に入る。）」と見えるが、やはり六朝詩には他の用例は見当たらない。

「關千扇」多くの扉が開放されている。「扇」はとびら。梁簡文帝「大同九年秋七月」詩に「高樓關左扇、迴望

依蘭橈（高樓 左扇關き、迴望して蘭橈に依る）。

「苑戸」南苑の出入口のとびら。これも六朝詩には他の用例は見当たらない。

「開万扉」数え切れないほど多くのとびらが開放されている。庾肩吾「七夕」詩に「玉匣卷懸衣、針樓開夜扉（玉匣 懸衣を巻き、針樓 夜扉開く）」。

3樓殿開珠履 4竹樹隔羅衣

「樓殿」大きく立派な宮殿。これも六朝詩中にはあまり見られない。庾信「詠画屏風」詩二十五首其十一に「出沒看樓殿、間関望綺羅（出沒 樓殿を看、間関 綺羅を望む）」。

「珠履」真珠の飾りのあるくつ。沈約「冬節後至丞相第詣世子車中」詩に「高車塵未滅、珠履故余声（高車塵 未だ滅せず、珠履 故より余声あり）」とあり、李善注は『史記』春申君列伝に「春申君客三千余人、其上客皆躡珠履。（春申君 客 三千余人、其の上客 皆な珠履を躡む。）」とあるのを引く。

「竹樹」竹林。これもあまり用例の多い語ではない。沈約「遊沈道士館」詩（『文選』二十二）に「山嶂遠重疊、竹樹近蒙籠（山嶂は遠く重疊として、竹樹は近く蒙籠たり）」。

「隔」物が間にあつてさえぎられている状態。ここは、竹林の向こう側に薄絹の衣裳を身に纏った美しい女性が、眼には見えないことを表現すると解した。

「羅衣」薄絹の衣裳。曹植「美女篇」に「羅衣何飄飄、輕裾隨風還（羅衣 何ぞ飄飄たる、輕裾 風に随ひて還る）」とあるなど、六朝詩中の「羅衣」は風に吹かれたり、露や涙に濡れるものとして描かれる。ここは、風に吹かれて衣擦れの音だけが聞こえてくると解した。

「苑中見美人（苑中に美人を見る）」

【本文及び書き下し】

- 1 羅袖風中卷 羅袖 風中に巻き
- 2 玉釵林下耀 玉釵 林下に耀く
- 3 团扇承落花 团扇 落花を承け
- 4 復持掩余笑 復た持して余笑を掩ふ

【日本語訳】

- 1 薄絹の袖が風の中で巻き上がり
- 2 玉のかんざしが林でキラリと輝きます
- 3 散る花を团扇で受け止め
- 4 そのまま团扇でクスクス笑いを覆い隠します

【校勘】

○『古詩紀』九十四。

0 「苑中見美人」、『詩紀』題下注云「一作『聯句』」。

【押韻】

「耀」「笑」、去声三十五笑韻。

の語と対をなすことが多い。

「林下」林。王融「擬古」詩二首其一（『玉台』十）に「花蒂今何在、亦是林下生（花蒂 今 何くにか在る、亦是林下に生ず）」。

3 团扇承落花 4 復持掩余笑

「团扇」丸く柄のある扇。班婕妤「怨歌行」に「新裂齊紈素、皎潔如霜雪。裁為合歡扇、团团似明月（新たに齊の紈素を裂けば、皎潔 霜雪の如し。裁ちて合歡扇と為せば、团团として 明月に似る）」。

「承」手を高く掲げて受け止める。ここは袖がずり落ちそうになる様子を描く。やや後の例になるが、梁邵陵王蕭綸「見姬人」詩に「却扇承枝影、舒衫受落花（却扇 枝影を承け、舒衫 落花を受く）」とあり、北周明帝宇文毓「和王褒詠摘花」詩に「玉腕承花落、花落腕中芳（玉腕 花の落つるを承け、花 落ちて 腕中 芳し）」。

「落花」散り落ちる花。あまり古い用例は見当たらないが、沈約「会圃臨春風」（『玉台』九作「臨春風」）に「遊糸暖如網、落花雰似霧（遊糸 暖として網の如く、落花 雰として霧に似る）」（『網』、『文苑英華』百五十六作「煙」）とある。「落英」の語であれば『楚辭』離騷に「朝飲木蘭之墜露兮、夕餐秋菊之落英（朝に木蘭の墜露を飲み、夕に秋菊の落英を餐らふ）」。

「復持」そのまま胸にかざして。劉孝綽「夜不得眠」詩

【語釈】

0 苑中見美人

「苑中」庭園の中。蕭子顯に「詠苑中遊人」詩（『玉台』十）という作がある。詩の内容からこの「遊人」も女性である。「苑」は南苑である可能性が高い。『芸文類聚』十八に何思澄「南苑逢美人」詩が見える。

「見美人」美しい女性を目にする。沈約「夢見美人」詩（『玉台』五）、劉孝綽「遙見美人採荷」詩（『玉台』十）、梁邵陵王蕭綸「車中見美人」詩（『玉台』七）と「玉台新詠」に用例が集中する。

1 羅袖風中卷 2 玉釵林下耀

「羅袖」薄絹の袖。美しい女性の衣裳。司馬相如「美人賦」に「玉釵挂臣冠、羅袖扞臣衣。（玉釵 臣の冠に挂かり、羅袖 臣の衣を扞ふ。）」とあり、柳惲「詠席」詩（『玉台』五）に「羅袖少輕塵、象牀多麗飾（羅袖 輕塵少なく、象牀 麗飾多し）」とある。

「風中」風が吹く中。謝朓「郡內高齋閑坐答呂法曹」詩（『文選』二十六）に「已有池上酌、復此風中琴（已に池上の酌有り、復た此に風中の琴あり）」とある。

「玉釵」玉製のかんざし。晋・無名氏「子夜四時歌」春歌二十首其九に「羅裳迥紅袖、玉釵明月璫（羅裳 紅袖に迥り、玉釵 明月の璫に）」と見える。右に引いた司馬相如「美人賦」がそうであるように「羅○」

に「光陰已如此、復持憂自催（光陰 已に此くの如し、復た持すれば 憂ひ自ら催さん）」とあるが、用例はそれほど多くない。

「掩余笑」团扇でそつと笑った口元を隠す。扇で口元を隠すというモチーフは何遜の詩にはしばしば現れ、「看伏郎新婚」詩に「何如花燭夜、輕扇掩紅粧（何如ぞ花燭の夜、輕扇 紅粧を掩ふに）」、「与虞記室諸人詠扇」詩に「揺風入素手、占曲掩朱唇（揺風 素手に入り、占曲 朱唇を掩ふ）」、「擬輕薄篇」に「倡女掩扇歌、小婦開簾織（倡女 扇に掩はれて歌ひ、小婦 簾を開きて織る）」、「擬青青河辺草転韻体為人作其人識節工歌」詩に「歌筵掩团扇、何時一相見」といった例がある。「余笑」は後に残された微かな笑い。六朝詩には他の用例は見当たらない。

「早朝車中瞻望（早朝 車中の瞻望）」

【本文及び書き下し】

- 1 詰旦鍾声罷 詰旦 鍾声 罷み
- 2 隱隱禁門通 隱隱として 禁門 通る
- 3 遽車響北闕 遽車 北闕に響き
- 4 鄭履入南宮 鄭履 南宮に入る
- 5 宿霧開馳道 宿霧 馳道に開け
- 6 初日照相風 初日 相風を照らす
- 7 胥徒紛絡馭 胥徒 紛として絡馭たり
- 8 騶御或西東 騶御 或いは西東す

- 9 暫喧耳目外 暫く喧し 耳目の外
10 還保性靈中 還た保つ 性靈の中
11 方駿遊朝市 方に駿す 朝市に遊びて
12 此説不為空 此の説の空しと為さざるを

【日本語訳】

- 1 朝早く、かねの音が夜明けを告げ終えると
2 宮城の門が開いてゴロゴロと車の音が響く
3 蓬伯玉のように礼を知る賢者の乗る車の音が北の宮殿に響き
4 鄭崇のように廉直の臣のくつ音が南の宮殿に入っている
5 前夜からの霧が晴れて、天子が大通りになる道が見え始め
6 昇ったばかりの太陽が車を飾る風見のトリを照らす
7 衛兵たちがワラワラと続き
8 御者たちは西に行く者は西に行き、東に行く者は東に行く
9 このような喧噪が耳や目の外側で繰り広げられるけれど
10 平穩は我が心の本来の有り様の中に保持されている
11 試みに名利を争う朝廷や市場に身を運んでみたのは
12 これが絵空事でないことを確かめるためなのだ

【校勘】

「車中」 朝廷に向かう車の中。
「聴望」 耳を傾けて聴いた音と眼で見たもの。六朝詩には他の用例は見当たらない。

1 詰旦鍾声罷 2 隱隱禁門通

「詰旦」夜明け頃。丘遲「侍宴讌樂遊苑送徐州庾詡」詩（『文選』二十。李善注本『文選』「送」下有「張」字。）に「詰旦闔闔開、馳道聞鳳吹（詰旦に闔闔 開き、馳道に鳳吹を聞く）」とあり、李善注は『春秋左氏伝』僖公二十八年に「戒爾車乗、敬爾君事、詰朝將見。（爾の車乗を戒め、爾の君事を敬めよ、詰朝 将に見んとす。）」とあり、杜預注に「詰朝、平旦。」とあるのを引く。

「鍾声」夜明けを知らせる鐘の音。『南齊書』武穆裴皇后伝に「宮内深隱、不聞端門鼓漏声、置鍾於景陽楼上、宮人聞鐘声、早起裝飾。（宮内 深隱として、端門鼓漏の声を聞かず、鍾を景陽楼上に置き、宮人 鐘声を聞けば、早に起きて裝飾す。）」とあり、庾信「登州中新閣」詩に「歌響聞長樂、鍾声徹建章（歌響 長樂に聞こえ、鍾声 建章に徹す）」。

「隱隱」多くの車が通る音。張衡「東京賦」（『文選』三）に「肅肅習習、隱隱磷磷。（肅肅習習、隱隱磷磷たり。）」とあり、薛綜注に「隱隱、衆多貌。磷磷、車声也。（隱隱、衆多の貌。磷磷、車声なり。）」と。また、晋・王鑑「七夕觀織女」詩（『玉台』三）に「隱隱驅千乘、闐

○『文苑英華弁証』六。『芸文類聚』三十九・『文苑英華』百九十皆引通・宮・風・東四韻。『顏氏家訓』文章引第三句。『古詩紀』九十三。

- 0 「早朝車中聴望」、『弁証』『類聚』作「早朝」。
3 「蓬」、薛本作「璩」。「車」、「家訓」作「居」。
5 「霧開」、『英華』作「霜開」。
6 「相」、張紘本・薛本作「喧」。「風」、「類聚」作「通」。
7 「胥徒紛絡駢」、『類聚』作「風胥徒紛繹」。
8 「騶」、『英華』作「騶」。
11 「驗」、『弁証』作「厭」、注云、「一作『驗』」。

【押韻】

「通」「宮」「風」「東」「中」「空」、上平一東韻。

【語釈】

0 早朝車中聴望

「早朝」この詩は『類聚』では「礼部中」朝会に、『英華』では「朝省一」趨朝に、『古詩類苑』では「礼部」朝会に収められており、「朝」を臣下が朝早く君主にまみえるという意味だと解した。詩に用いられるようになったのは梁の頃からのようである。『文苑英華弁証』六の注に「『文苑』与『類聚』止有前八句、而集本題作『早朝車中聴望』、有全篇如上。（『文苑』と『類聚』と止だ前八句有るのみにして、集本 題して『早朝車中聴望』に作り、全篇の上の如き有り。）」。

闐越星河（隱隱として千乗を駆り、闐闐として星河を越ゆ）とある。

「禁門」宮城の門。鮑照「代放歌行」（『文選』二十八作「放歌行」）に「鷄鳴洛城裏、禁門平旦開（鷄鳴 洛城の裏、禁門 平旦に開く）」とあり、李善注は『東觀漢記』伏湛伝に「杜詩薦湛疏曰、『…』。柱石之臣、宜居輔弼、出入禁門、補闕拾遺」（杜詩 湛を薦め疏して曰く、『…』。柱石の臣、宜しく輔弼に居り、禁門に出入して、闕くるを補ひ遺るを拾ふべし」と。）とあるのを引く。

3 蓬車響北闕 4 鄭履入南宮

「蓬車」礼を知る賢者が乗った車。『列女伝』衛靈夫人に「衛靈公与夫人夜坐、聞車声磷磷。至闕而止、過闕復有声。公問夫人曰、『知此謂誰』。夫人曰、『此必蓬伯玉也』。公曰、『何以知之』。夫人曰、『妾聞、礼、下公門、式路馬。所以広敬也。…蓬伯玉、衛之賢大夫也。仁而有智、敬於事上。此其人必不以闇昧廢礼、是以知之』。（衛の靈公 夫人と夜坐し、車の声の磷磷たるを聞く。闕に至りて止み、闕を過ぎて復た声有り。公 夫人に問ひて曰く、『此れを知りて誰と謂へるか』と。夫人 曰く、『此れ必ず蓬伯玉なり』と。公 曰く、『何を以てか之れを知る』と。夫人 曰く、『妾 礼に、公門に下り、路馬に式す、と聞く。敬を広むる所以なり。…蓬伯玉は、衛の賢大夫なり。仁にして智有り、

上に事ふるに敬す。此れ其の人 必ず闇昧を以て礼を廃せず、是を以て之れを知る』と。公 之れを視しむれば、果して伯玉なり。」と見える故事に拠る。六朝詩には他の用例は見当たらない。

〔北闕〕北側の宮殿。『漢書』高帝紀下に「蕭何治未央宮、立東闕・北闕・前殿・武庫・太倉。（蕭何 未央宮を治め、東闕・北闕・前殿・武庫・太倉を立つ。）」とあり、その顔師古注に「未央宮 南に向くと雖も、而も上書・奏事・謁見の徒 皆な北闕に詣る。」とある。陸機「擬青青陵上柏」詩（『文選』三十）に「高門羅北闕、甲第椒与蘭（高門は北闕に羅なり、甲第は椒と蘭となり）」とあり、李善注は張衡「西京賦」（『文選』二）に「北闕甲第、当道直啓。（北闕の甲第、道に当たりて直ちに啓く。）」とあるのを引く。

〔鄭履〕清廉で諫言する勇氣を持つ人が乗った車。『漢書』鄭崇伝に「哀帝擢為尚書僕射。数求見諫争、上初納用之。毎見曳革履、上笑曰、『我識鄭尚書履声』。（哀帝擢でて尚書僕射と為す。数しば見ゆるを求めて諫争し、上 初め納めて之れを用ふ。見ゆる毎に革履を曳き、上 笑ひて曰く、『我 鄭尚書の履声を識る』と。）」と見える故事に拠る。六朝詩には他の用例は見当たらない。

〔南宮〕南側の宮殿。詩では何遜以前の用例は少ない。庾信「道士步虚詞」十首其八に「北闕臨玄水、南宮生絳雲（北闕 玄水に臨み、南宮 絳雲生ず）」とあり、

麗初日、清風消薄霧」と見えるが、詩では何遜以前の用例は見当たらない。

〔相風〕乗り物に取り付けた、風向きを知るための飾り。鳥の形をしている。『晋書』輿服志に「中朝大駕鹵簿…、次相風、中道。」と見え、梁簡文帝「行幸甘泉宮」に「尚書随豹尾、太史逐相風（尚書は豹尾に随ひ、太史は相風を逐ふ）」。

7 胥徒紛絡駅 8 驕御或西東

〔胥徒〕ここは護衛の兵士。語は『周礼』天官・冢宰に「胥、十有二人。徒、百有二十人。（胥は、十有二人。徒は、百有二十人。）」とあるのに基づき、労役に従事する者をいう。鄭玄注に「此民給徭役者、若今衛士矣。胥、読如謂、謂其有才知、為什長。（此れ民の徭役に給する者にして、今の衛士の若し。胥、読みて謂の如く、其の才知有りて、什長と為るを謂ふ。）」とあるが、六朝詩には他の用例は見当たらない。

〔絡駅〕途切れることなく続く様。絡繹、駱駝とも。漢・馬融「長笛賦」（『文選』十八）に「繁縟駱駝、范蔡之説也。（繁縟駱駝たるは、范蔡の説なり。）」とあり、李善注に「辞旨 繁縟にして、又た相ひ連続するなり。」と。詩では「古詩為焦仲卿妻作」に「交語速装束、絡繹如浮雲（語を交はして装束を速やかにし、絡繹たること浮雲の如し）」（「絡繹」、『玉台』作「駱駝」と。〔驕御〕御者。他には陳・阮卓「長安道」に「藹藹東都

陳・沈炯「長安少年行」にも「建章通北闕、複道度南宮（建章 北闕に通じ、複道 南宮に度る）」。

5 宿霧開馳道 6 初日照相風

〔宿霧〕朝になつてもまだ消え残る夜霧。陶淵明「詠貧士」詩七首其一に「朝霞開宿霧、衆鳥相与飛（朝霞宿霧を開き、衆鳥 相ひ与に飛ぶ）。」

〔馳道〕天子の車が通る道。『礼記』曲礼下に「歳凶、年穀不登、君膳不祭肺、馬不食穀、馳道不除、祭事不果。（歳 凶にして、年穀 登らざれば、君 膳に肺を祭らず、馬 穀を食はず、馳道 除はず、祭事 果せず。）」とあり、孔穎達疏に「馳道、正道。如今之御路也。是君馳走車馬之处、故曰馳道也。（馳道、正道なり。今の御路の如きなり。是れ君の車馬を馳走するの处、故に馳道と曰ふなり。）」という。また、鮑照「代君子有所思」（『文選』三十一。『四部叢刊』本『鮑氏集』作「代陸平原君主有所思行」）に「層閣肅天居、馳道直如髮（層閣 肅として天居のごとく、馳道 直きこと髪のように）」とあって、李善注は『漢書』成帝紀に「上嘗急召、太子出龍樓門、不敢絶馳道。（上 嘗て急に召すに、太子 龍樓門を出で、敢へて馳道を絶たず。）」とあり、顔師古注が引く応劭の説に「馳道、天子所行道也、若今之中道。（馳道、天子の行く所の道なり、今の中道の若し。）」とあるのを引く。

〔初日〕昇ったばかりの太陽。何遜「曉發」詩に「早霞

晚、群公驕御回（藹藹たる東都の晩、群公の驕御 回る）」と見える以外には六朝詩に他の用例は見当たらない。

〔西東〕西へ行く者は西へ行き、東に行く者は東に行く。梁簡文帝「大同八年秋九月」詩に「酒闌嘉宴罷、車騎各西東（酒 闌にして 嘉宴 罷み、車騎 各おの西東す）。」

9 暫喧耳目外 10 還保性靈中

〔暫く、還く〕しばしとして、またやはり…。鮑照「贈故人馬子喬」詩六首其二（『玉台』四作「贈故人」）に「春氷雖暫解、冬氷復還堅（春氷 暫く解くと雖も、冬氷 復た還た堅し）」（「水」、『玉台』作「氷」と。

〔耳目外〕音を聞く耳やものを見る目の外側。梁・鍾嶸『詩品』上に「晋歩兵阮籍詩、其源出於小雅、無雕蟲之功。而詠懷之作、可以陶性靈、發幽思。言在耳目之外、情寄八荒之表。洋洋乎會於風雅、使人忘其鄰近、自致遠大。頗多感慨之詞、厥旨淵放、帰趣難求。（晋の歩兵阮籍の詩、其の源は小雅に出で、雕蟲の功無し。而して詠懷の作は、以て性靈を陶し、幽思を發すべし。言は耳目の外に在るも、情は八荒の表に寄す。洋洋乎として風雅に会ひ、人をして其の鄰近を忘れ、自ら遠大を致さしむ。頗る感慨の詞多きも、厥の旨は淵放にして、帰趣 求め難し。）」とある。「耳目」の語は何遜には「答高博士」詩に「将子厭囂塵、就予開耳目」

「登石頭城」詩に「眺聽窮耳目、遠近備幽悉」との用例がある。

「性靈」本来の心の在り様。梁・劉孝標「弁命論」(『文選』五十四)に「或立教以進庸怠、或言命以窮性靈。(或いは教へを立てて以て庸怠を進め、或いは命を言ひて以て性靈を窮む。)」とあるが、詩にはあまり用いられない。

11方駿遊朝市 12此説不為空

「方駿」實際どうなのかちょうど調べてみたところだ。江淹「贈鍾丹法和殷長史」詩に「方駿參同契、金竈鍊神丹(方に駿す 參同契、金竈 神丹を鍊る)」と見える。

「遊朝市」名譽や利益を争う場に身を運ぶ。ここは都に上る。『史記』張儀列伝に「臣聞争名者於朝、争利者於市。今三川・周室、天下之朝市也。(臣 聞く 名を争ふ者は朝に於いてし、利を争ふ者は市に於いてすと。今 三川・周室は、天下の朝市なり。)」とあり、晋・王康琚「反招隱」詩(『文選』二十二)に「小隱隱陵藪、大隱隱朝市(小隱は陵藪に隠れ、大隱は朝市に隠る)」と見え、「朝市」は朝廷や市場をいう。

【此説】このような考え方。ここは第9・10句を受けて、「朝市」の喧噪の中に在っても我が心の平穩は保持されるのだということ。六朝詩には他の用例は見当たらない。

「不為空」絵空事ではない。これも六朝詩には他の用例は見当たらない。

「入西塞示南府同僚(西塞に入りて南府の同僚に示す)」

【本文及び書き下し】

- | | |
|----------|----------------|
| 1 露清曉風冷 | 露 清くして曉風 冷たく |
| 2 天曙江晃爽 | 天 曙けて江晃 爽らかに |
| 3 薄雲巖際出 | 薄雲 巖際より出で |
| 4 初月波中上 | 初月 波中より上る |
| 5 黯黯連嶂陰 | 黯黯として連嶂 陰り |
| 6 騷騷急沫響 | 騷騷として急沫 響く |
| 7 迴植急礙浪 | 迴植 急に浪に礙げられ |
| 8 群飛争戲広 | 群飛 争ひて広きに戯る |
| 9 伊余本羈客 | 伊れ余は本羈客 |
| 10 重暎復心賞 | 重ねて暎れ復た心賞す |
| 11 望鄉雖一路 | 郷を望めば一路なりと雖も |
| 12 懷帰成二想 | 帰らんことを懷へば二想を成す |
| 13 在昔愛名山 | 在昔 名山を愛し |
| 14 自知權独往 | 自ら独往を權ぶを知る |
| 15 情游乃落魄 | 情游して乃ち落魄し |
| 16 得性随怡養 | 性を得て怡養に随ふ |
| 17 年事以蹉跎 | 年事は以て蹉跎として |
| 18 生平任浩蕩 | 生平は浩蕩に任す |
| 19 方還讓夷路 | 方に還りて夷路を讓らん |

20 誰知羨魚網 誰か知らん 魚を羨むの網を

【日本語訳】

- 1 露は清らかに透明で夜明けの風が冷たく
- 2 日が昇り長江の川面がキラキラと輝いています
- 3 薄い雲が崖と崖の間から湧き出て
- 4 細い細い月が波間から昇っていきます
- 5 そそり立つ峰々はなお仄暗く
- 6 風が吹いて激しい水しぶきの音が鳴り響いています
- 7 向きを変えようとしている筏は波に邪魔されてバタバタと慌ただしく
- 8 群れなして飛ぶ鳥はいかにも楽しそうに空を飛び回ります
- 9 わたしは元々が旅人なので
- 10 今またあなた方と別れて心から楽しむことのできる地に帰って来ました
- 11 故郷の方を見遣れば道は一筋なのに
- 12 いざ帰ろうとすると、帰ろうか帰るまいか二つの思いが生じます
- 13 むかし、名山を慕って
- 14 自由気儘に生きる生き方こそが自分には心楽しいことなのだと悟りました
- 15 心のままに旅をしていると、失意の内に困窮することになったので
- 16 心に適う地で心身をゆつくりと休めようと思うのです

- 17 歲月はどんどんとムダに過ぎていき
- 18 常日頃の生活はふらふらと寄る辺ないものになってしまいました
- 19 今ちようど心に適う地に帰って来ましたから、歩き易い道はお譲りしますが
- 20 わたしが気儘に泳ぎ回る魚を羨むような虚しい希望を抱くよりは、魚を捕らえる網を結ぶような現実的な生き方をする方がマシだ思っていることを、いったい誰が分かってくれましょう

【校勘】

○『古詩紀』九十三。

2 「晃」、『詩紀』・底本注云「一作『光』」。

【押韻】

「爽」「上」「響」「賞」「想」「往」「養」「網」、上声三十六養韻。「広」「蕩」、上声三十七蕩韻。養・蕩同用。

【語釈】

0 入西塞示南府同僚

【西塞】山名。植木久行編『中国詩跡事典』(二〇一五 研文出版)に

西塞山は、湖北省黄石市(武漢市の東南)の東郊外、高さ五三〇呎の、長江南岸にある山の名。『元和郡県図志』二八に、「竦峭(高峻)として江に臨

む」という。古来、長江中流の要害として争奪の地となった。太康元年（二八〇）、西晋の將軍王濬は長江を下り、西塞山付近で呉軍の防御を破って、呉の都建業（南京市）を攻略した。かくして呉は西晋に降服する。呉の軍にとつて、まさに当地は「西の塞」（長江防御の前線）だったのである。

とある。天監十六（五一七）年、母の喪が明けた何遜は江州刺史となった廬陵王蕭統に随い、江州（江西省九江市周辺）に赴くことになった。その際、西塞山を目の前にした時の作だろう。江淹「渡西塞望江上諸山」と題する詩がある。

〔南府〕尚書省をいう。『北史』柳虬伝に「以虬為行台郎中、諫為北府屬、並掌文翰。時人為之語曰、『北府裴諫、南府柳虬』。（虬を以て行台郎中と為し、諫を北府の属と為して、並びに文翰を掌らしむ。時人、之れが語を為りて曰く、『北府の裴諫、南府の柳虬』と。）」と見えるが、六朝詩にはこの意味での用例は見当たらない。『梁書』本伝に「天監中、起家奉朝請、遷中衛建安王水曹行參軍、兼記室。王愛文学之士、日与遊宴。及遷江州、遜猶掌書記。還為安西安成王參軍事、兼尚書水部郎、母憂去職。服闋、除仁威廬陵王記室、復随府江州、未幾卒。（天監中、奉朝請に起家し、中衛建安王の水曹行參軍に遷り、記室を兼ね。王、文学の士を愛し、日び与に遊宴す。江州に遷るに及び、遜、猶ほ書記を掌る。還りて安西安成王の參軍事と為り、尚書水部郎

を兼ね、母の憂ひに職を去る。服闋け、仁威廬陵王の記室に除せられ、復た府に江州に随ひ、未だ幾くならずして卒す。）」と、何遜が「尚書水部郎」の職にあつたことが見える。

〔同僚〕同じ役所に勤めている仲間。同寮とも。語は潘尼「贈陸機出為吳王郎中令」詩（『文選』二十四）六章其三に「及爾同僚、具惟近臣（爾と僚を同じくし、具に惟れ近臣なり）」と見え、李善注は「詩経」大雅・板に「我雖異事、及爾同寮（我、事を異にすと雖も、爾と寮を同じくす）」とあるのを引く。その毛伝に「寮、官也。」

1 露清曉風冷 2 天曙江晃爽

〔露清〕露が透明で清らか。漢・王褒「洞簫賦」（『文選』十七）に「朝露清冷而隕其側兮、玉液浸潤而承其根。（朝露、清冷にして其の側に隕ち、玉液、浸潤して其の根に承く。）」とある。

〔曉風〕夜明けの風。鮑照「上潯陽還都道中作」詩に「鱗鱗夕雲起、獵獵晚風遒（鱗鱗として、夕雲、起こり、獵獵として、晚風、遒る）」とあり、李善注本『文選』は「晚」を「曉」に作る。また、沈約「詠雪應令」詩に「夜雪合且離、曉風驚復息（夜雪、合ひて且つ離れ、曉風、驚きて復た息む）」とある。

〔天曙〕夜が明ける。晋・劉伶「北芒客舍」詩に「寒鷄思天曙、擁翅吹長音（寒鷄、天曙を思ひ、翅を擁して

長音を吹く）。〕

〔江晃爽〕長江が朝日を受けて明るく輝く。〔江晃〕、六朝詩には他の用例は見当たらない。〔爽〕は明るい。

3 薄雲巖際出 4 初月波中上

〔薄雲〕薄い雲。晋・謝安「蘭亭」詩二首其二に「薄雲羅陽景、微風翼輕航（薄雲、陽景に羅なり、微風、輕航を翼く）。〕

〔巖際〕切り立った崖と崖の間。六朝詩には他の用例は見当たらない。梁・張充「与王儉書」（『梁書』張充伝）に「奇禽異羽、或岩際而逢迎、弱霧輕煙、乍林端而奄藹。（奇禽異羽、或いは岩際にして逢迎し、弱霧輕煙、乍ち林端にして奄藹たり。）」とある。

〔初月〕明け方、東の空に昇る細い月。謝靈運「登永嘉綠嶂山」詩に「眷西謂初月、顧東疑落日（西を眷みては初月かと謂ひ、東を顧みては落日かと疑ふ）。〕

〔波中〕波間。梁・吳均「遥贈周承」詩に「練練波中月、亭亭雲上枝（練練たり、波中の月、亭亭たり、雲上の枝。）」と。陳祚明「采菽堂古詩選」に「写境曠遠、言情亦復浩蕩。『薄雲』二句佳、杜少陵襲用、稍加變化。『宿』字較有作意。『孤月浪中翻』、『翻』字亦活、然与此自分古近。（境を写して曠遠、情を言ひて亦た復た浩蕩。『薄雲』の二句、佳、杜少陵襲用して、稍變化を加ふ。『宿』の字、較作意有り。『孤月浪中に翻る』、『翻』

の字も亦た活あり、然れども此れと自ら古近を分か

つ。）」と杜甫「宿江辺閣」詩の「薄雲巖際宿、孤月浪中翻（薄雲、巖際に宿り、孤月、浪中に翻る）」と比較している。

5 黯黯連嶂陰 6 騷騷急沫響

〔黯黯〕暗い様。陶淵明「祭程氏妹文」に「黯黯高雲、蕭蕭冬月。（黯黯たる高雲、蕭蕭たる冬月。）」とあり、梁元帝「蕩婦秋思賦」に「日黯黯而將暮、風騷騷而渡河。（日、黯黯として將に暮れんとし、風、騷騷として河を渡る。）」と見えるが、詩では陳琳「詩」（『詩紀』作「遊覽」）に「肅肅山谷風、黯黯天路陰（肅肅たり山谷の風、黯黯たり、天路の陰）」（『黯黯』、『詩紀』作「默默」、而注云「一作『黯黯』。）」と。第2句「天曙」を承ける。

〔連嶂〕そそり立つ連峰。六朝詩には他の用例は見当たらない。〔嶂〕は高くそびえる山。

〔騷騷〕風が吹き抜ける音。張衡「思立賦」（『文選』十五）に「寒風凄其永至兮、弘窮岫之騷騷。（寒風、凄として、其れ永く至り、窮岫の騷騷たるを弘ふ。）」とあり、李善注は「騷騷、風勁貌。（騷騷、風の勁き貌。）」とする。また、謝莊「長笛弄」に「青苔蔓、熒火飛。騷騷落葉散衣（青苔、蔓り、熒火、飛ぶ。騷騷として、落葉、衣に散る）」と。第1句「曉風」を承ける。

〔急沫〕激しく飛び散る水しぶき。鮑照「望水」詩に「流駛巨石転、湍迴急沫上（流れ駛せて、巨石、転じ、湍

迴りて 急沫 上る」と見えるが、用例はそれほど多くない。

7 廻棹急礙浪 8 群飛争戲広

〔廻棹〕向きを変えようとしている筏。六朝詩には他の用例は見当たらない。

〔礙浪〕川の波に邪魔される。六朝詩には他の用例は見当たらない。

〔群飛〕群れを成して飛ぶ。また群れになつて飛ぶ鳥を指す。潘岳「射雉賦」〔「文選」九〕に「涉青林以游覧兮、樂羽族之群飛」。(青林を涉りて以て游覧し、羽族の群飛するを楽しむ。)とあり、秦嘉「贈婦」詩に「啾啾鷄雀、群飛赴楹」(啾啾たる鷄雀、群飛して楹に赴く)。

〔戲広〕広い空を樂しそうに飛び回る。語は木華「海賦」〔「文選」十二〕に「群飛侶浴、戲広浮深」。(群がり飛び侶がり浴し、広きに戯れ深きに浮かぶ。)とあるのに拠る。〔広〕は天空。後の例だが、江総「賦得汎汎水中鳬」詩に「浮深或不息、戲広若乘空」(深きに浮かびて或いは息まず、広きに戯れて空に乗るが若し)と見える。

9 伊余本羈客 10 重睽復心賞

〔伊余〕わたし。一人称代名詞。曹植「責躬」詩〔「文選」二十〕に「伊余小子、恃寵驕盈」(伊れ余 小子、寵を恃みて驕盈たり)とある。

〔羈客〕旅人。羈客とも。陳琳「詩」に「高会時不娛、羈客難為心」(高会も時に娛しまず、羈客 心を為し難し)とあり、鮑照「代懼歌行」に「羈客離嬰時、飄飄無定所」(羈客 離嬰するの時、飄飄として定まる所無し)。

〔重睽〕またもや別れ別れになる。六朝詩には他の用例は見当たらない。〔睽〕は睽に通じ、別れる、そむく。謝靈運「南樓中望所遲客」詩〔「文選」三十〕に「即事怨睽携、感物方悽戚」(事に即きて睽携を怨み、物に感じて方に悽戚す)。

〔心賞〕心からめぐる。ここは、以前心からめぐることできた地を再訪してもう一度めぐる機会を得た。鮑照「代白頭吟」〔「文選」二十八作「白頭吟」〕。『玉台』四作「擬樂府白頭吟」に「心賞猶難恃、貌恭豈易憑」(心賞 猶ほ恃み難く、貌恭 豈に憑み易からんや)とあり、謝朓「京路夜發」詩に「文奏方盈前、懷人去心賞」(文奏 方に前に盈ち、人を懷ふも心賞を去る)。

11 望鄉雖一路 12 懷帰成二想

〔望郷〕故郷の方を遠くから眺める。ふるさとを懷かしく思う。何遜「下方山」詩「望郷行復立」【語釈】参照。〔一路〕たった一筋の道。あまり用例は多くないが、徐悱「对房前桃樹詠佳期贈内」詩〔「玉台」六〕に「無如一路阻、脈脈似雲霞」(如ともする無し 一路 阻たり、脈脈として雲霞に似るを)。

〔懷帰〕帰りたいと思う。王粲「登樓賦」に「情眷眷而懷帰兮、孰憂思之可任」。(情 眷眷として 帰らんことを懷ひ、孰か憂思の任ふべき。)とあり、李善注は『詩経』小雅・小明に「豈不懷帰、畏此罪罟」(豈に帰らんことを懷はざらんや、此の罪罟を畏る)とあるのを引く。

〔二想〕二つの思い。六朝詩には他の用例は見当たらない。ここは、故郷に帰り同僚であるみんなに会いたいという気持ちと、このまま旅を続け心に適う山水を樂しみたいという気持ち。

13 在昔愛名山 14 自知懂独往

〔在昔〕むかし、以前。顔延之「北使洛」詩に「在昔輟期運、經始闢聖賢」(在昔 期運を輟め、經始 聖賢を闢く)とあり、李善注は『詩経』商頌・那に「自古在昔、先民有作」(古より在昔、先民 作す有り)とあるのを引く。

〔名山〕美しく名のある山。郭璞「遊仙」詩十九首其八に「採藥遊名山、將以救年頽」(藥を採りて名山に遊び、將に以て年の頽るるを救はんとす)。

〔自知〕自分のことをよく分かっている。吳邁遠「飛來双白鵲」に「譬如空山草、零落心自知」(譬へば空山の草の如く、零落 心 自ら知る)。

〔懂〕心から嬉しそうにする。歛に通じる。〔独往〕すべての束縛から逃れ一人で自由気儘にふるま

う。謝靈運「入華子崗是麻源第三谷」〔「文選」二十六〕に「且申独往意、乘月弄潺湲」(且く独往の意を申べ、月に乗じて潺湲たるを弄ばん)とあり、李善注は淮南王『莊子略要』の「江海之士、山谷之人、輕天下、細万物而独往者也」(江海の士、山谷の人は、天下を輕んじ、万物を細かにして独り往く者なり。)を引き、その司馬彪注「独往、任自然不復顧世也」(独往、自然に任せて復た世を顧みざるなり。)を引く。

15 情游乃落魄 16 得性随怡養

〔情游〕心のままに旅をして回る「縱情遊覧」の意だろうが、六朝詩には他の用例は見当たらない。梁簡文帝「玄圃園講頌」序に「情遊彼岸、理愜祇園」(情は彼岸に遊び、理は祇園に愜ふ。)。

〔落魄〕失意の内に困窮する。「魄」、拓に通じる。晁韻。任昉「答陸倕知已賦」〔「類聚」三十一〕に「信落魄而無産、終長務於短生」(信に落魄して産無く、終に長く短生に務む。) (「務」、『梁書』陸倕伝作「対」)と見えるが、六朝詩には他の用例は見当たらない。

〔得性〕生まれながらの性質に適っていること。『詩経』小雅・魚藻に「魚在在藻、有頒其首」(魚 在り 藻に在り、頒たる其の首有り)とあり、毛伝に「魚以依蒲藻為得其性」(魚 蒲藻に依るを以て其の性を得たりと為す。)とあるのに拠る。謝靈運「道路憶山中」詩に「得性非外求、自己為誰纂」(性を得るは外に求むる

に非ず、自ら已むのみにして誰が為にか纂(みづ)がん」。

「怡養」心身を休ませる。双声。頤養に同じ。頤は保養する。『後漢書』馬融伝に「夫楽而不荒、憂而不困、先王所以平和府蔵、頤養精神、致之無疆。(夫れ樂しみて荒まず、憂へて困しまざるは、先王の府蔵を平和にし、精神を頤養し、之れを無疆に致す所以なり。)」と見えるが、六朝詩には他の用例は見当たらない。

17 年事以蹉跎 18 生平任浩蕩

「年事」歲月、時間。六朝詩には他の用例は見当たらない。

「蹉跎」無駄に時間が過ぎていく。疊韻。謝朓「和王長史臥病」詩に「日与歳眇邈、帰恨積蹉跎(日歳と与に眇邈として、帰恨積むこと蹉跎たり)」。

「生平」常日頃の生活。疊韻。平生とも。謝朓「詠邯鄲故才人嫁為厮養卒婦」(『玉台』四)に「生平宮閣裏、出入侍丹墀(生平 宮閣の裏、出入 丹墀に侍す)」と見える。

「浩蕩」寄る辺なく漂う様。疊韻。謝朓「和王著作融八公山」詩に「浩蕩別親知、連翩戒征軸(浩蕩として親知に別れ、連翩として征軸を戒む)」とあり、李善注は『楚辭』哀時命(嚴忌)に「処卓卓而日遠兮、志浩蕩而傷懷。(処ること卓卓として 日び遠く、志 浩蕩として傷み懷ふ。)」とあるのを引く。

- | | |
|----------|----------------|
| 4 含毫亦禁阻 | 毫を含むも亦た禁阻せらる |
| 5 直廬去咫尺 | 直廬 去ること咫尺 |
| 6 心期得宴語 | 心期 宴語するを得ん |
| 7 休沐乃幽棲 | 休沐は乃ち幽棲 |
| 8 別離未幾許 | 別離 未だ幾許ならず |
| 9 佇立日將暮 | 佇立して 日 將に暮れんとし |
| 10 相思忽無緒 | 相ひ思ひて 忽ち緒無し |
| 11 谿北映初星 | 谿北 初星映じ |
| 12 橋南望行炬 | 橋南 行炬を望む |
| 13 九重不可越 | 九重 越ゆべからず |
| 14 三爵何由舉 | 三爵 何に由りて挙げん |

【日本語訳】

- 1 あなた様は美しい詩文をものされ
- 2 教えを請う年長者として、わたしの以前の勤務地である梁楚の地でも名声を得ておられました
- 3 私はと言えば、ありがたくも官に任じられてはおりませんが
- 4 筆を口に含んで想を巡らせても、なかなか言葉が出て来ません
- 5 わたくしが宿直をしておりますところは、すぐ近くなのですから
- 6 心の友たるあなた様と酒を酌み交わしながら談笑することもできるはずです
- 7 役所の休暇はすなわち隠者の暮らし、人付き合いはほ

19 方還讓夷路 20 誰知羨魚網

「方還」ちょうど元いた場所に帰ろうとしている。六朝詩には他の用例は見当たらない。ここは、何遜が以前いた江州にほど近い鄂州に帰ろうとしていることをいう。

「夷路」平坦で歩き易い道。潘尼「贈河陽」詩(『文選』二十四)に「逸驥騰夷路、潜龍躍洪波(逸驥 夷路に騰がり、潜龍 洪波に躍る)」と見える。ここは出世街道。

「羨魚網」自由に泳ぎ回る魚を虚しく羨むよりは魚を捕らえる網を結んだ方がよい。いたずらに願望を抱くよりは、現実的な行動をとった方がよいということの比喩。『漢書』董仲舒伝に「古人有言曰、『臨淵羨魚、不如退而結網』。(古人に言へる有りて曰く、『淵に臨みて魚を羨むは、退きて網を結ぶに如かず』と。)」と見える。謝朓「和刘西曹望海台」詩に「臨川徒可羨、結網庶時當(川に臨みては徒らに羨むべく、網を結びては時に當まんことを庶ふ)」。

「下直出谿边望答虞丹徒教(直より下り谿边に出でて望み、虞丹徒の教に答ふ)」

【本文及び書き下し】

- | | |
|---------|--------------|
| 1 夫君美章句 | 夫れ君は美章句 |
| 2 席丈珍梁楚 | 席丈 梁楚に珍とせらる |
| 3 伊余忝撰官 | 伊れ余は 忝くも官を撰し |

- とんどありません
- 8 お互い離れ離れになっていますが、いったいどれほどの距離があるのでしょうか
 - 9 やがて日が沈もうとする頃、じつとたたずみながら
 - 10 あなた様のことを思っても、すぐに暗くなってしまう眺めていることができなくなりました
 - 11 谷川の北に姿を現したばかりの星が瞬き
 - 12 橋の南側に行き交う漁り火を眺めるばかりです
 - 13 禁中を守る九重の門はなかなか越えられません
 - 14 いっただいどうすれば杯を重ねて酒を酌み交わすことができるのでしょうか

【校勘】

○『古詩紀』九十三。

0 「丹徒」、薛本作「徒丹」。「教」、『詩紀』・張紘本・薛本並作「敬」。

5 「咫」、薛本作「只」。

6 「宴」、薛本作「晏」。

【押韻】

「楚」「阻」「語」「許」「緒」「炬」「舉」、上声八語韻。

【語釈】

0 下直出谿边望答虞丹徒教

「下直」宮中での宿直を終える。六朝詩には他の用例は

見当たらない。何遜が尚書水部として建康にいた頃の作だと思われる。

〔谿邊〕たにがわのほとり。晋・無名氏「前溪歌」七首其五（『玉台』十）に「黃葛結蒙籠、生在洛溪邊（黃葛結びて蒙籠たり、生じて洛溪の辺に在り）」と見えるが六朝詩にはその他の用例は見当たらない。

〔答く教〕指令の文書に答える。「教」は文体の一つ。上から下への命令。『文心彫龍』詔策に「教者効也。言出而民効也。（教は効なり。言出でて民効ふなり。）」とあり、漢・孔融に「答王修挙孝廉讓邴原教」（『三國志』魏書・王修伝「挙孝廉、修讓邴原、融不聽。（孝廉に挙げられ、修邴原に讓らんとするも、融聽さず。）」裴松之注引『融集』）との文章がある。

〔虞敬丹徒〕丹徒県の長官だった虞某。未詳。丹徒県は江蘇省鎮江市。天監十四（五一五）年、母の喪のため官を辞し、故郷の郊県に帰っていた頃の作ではないかと思う。

1 夫君美章句 2 席文珍梁楚

〔夫君〕友人。ここは虞丹徒を指す。何遜「寄江州褚諮議」詩「夫君頗留滯」【語釈】参照。

〔章句〕ひろく詩文をいう。ここは虞丹徒から何遜に宛てた「教」を指す。謝朓「始之宣城郡」詩に「下帷闕章句、高談魏名理（帷を下るすも章句を闕き、高談名理に媿づ）」と見えるが、こちらは学問の意。

より軽きも、弱冠にして嘉招を忝くす」。

〔撰官〕官職を兼務する、また官職に就くことを謙遜している。潘岳「秋興賦」序に「撰官承乏、猥廁朝列。（官を撰し乏しきを承け、猥りに朝列に廁る。）」とあり、李善注は『春秋左氏伝』成公二年に「敢告不敏、撰官承乏。（敢て不敏を告げ、官を撰し乏しきを承く。）」とあるのを引く。

〔含毫〕筆を口に含んで想を練る。陸機「文賦」に「或操觚以率爾、或含毫而邈然。（或いは觚を操りて以て率爾たり、或いは毫を含みて邈然たり。）」とあり、謝朓「和蕭中庶直石頭」詩に「詠沼邈含毫、專城空坐嘯（沼を詠じては邈として毫を含み、專城を専らにしては空しく坐嘯す）」。

〔禁阻〕言葉がさえぎられてなかなか出て来ない。第1句「美章句」に対して言うのだろうが、六朝詩には他の用例は見当たらない。

5 直廬去咫尺 6 心期得宴語

〔直廬〕宮中で宿直をするところ。陸機「贈尚書郎顧彥先」詩二首（『文選』二十四）其二に「朝遊遊層城、夕息旋直廬（朝に遊ばんとして層城に遊び、夕に息はんとして直廬に旋る）」とあり、李善注は張晏『漢書注』を引いて「直宿曰廬也。（直宿を廬と曰ふなり。）」とする。

〔咫尺〕距離が非常に短いこと。徐幹「答劉楨」詩に「雖

〔席丈〕教えをいただく年長者の尊称。丈席とも。語は『礼記』曲礼上に「若非飲食之客、則布席、席間函丈。（若し飲食の客に非ざれば、則ち席を布くに、席間丈を函る。）」とあり、鄭玄注に「謂講問之客也。函、猶容也。講問宜相對容丈、足以指画也。（講問の客を謂ふなり。函、猶ほ容のごときなり。講問には宜しく相ひ対して丈を容れ、以て指画するに足らしむべきなり也。）」とあるのに拠るが、六朝詩には他の用例は見当たらない。

〔珍梁楚〕安徽省北部から河南省東部、湖北省にかけての地で名声を得ている。『史記』季布欒布列伝に「曹丘至、即揖季布曰、『楚人諺曰、『得黄金百斤、不如得季布一諾』、足下何以得此声於梁楚間哉。』（曹丘至り、即ち季布に揖して曰く、『楚人の諺に曰く、『黄金百斤を得るは、季布の一諾を得るに如かず』と、足下何を以て得此の声を梁楚の間に得たるか。』と。』と。』とある。何遜は天監九（五一〇）年から十二年にかけて、建安王蕭偉に従って江州に赴いていたので、ここは以前の勤務地をいうだろう。

3 伊余忝撰官 4 含毫亦禁阻

〔伊余〕わたし。何遜「入西塞示南府同僚」詩「伊余本羈客」【語釈】参照。

〔忝〕もつたいなくも。謙遜に用いる。潘岳「河陽県作」詩二首其一に「微身輕蟬翼、弱冠忝嘉招（微身は蟬翼

路在咫尺、難涉如九関（路咫尺に在りと雖も、涉り難きこと九関の如し）」とある。

〔心期〕親友。王運路前掲書に「『心期』謂朋友・知己。『心期』本謂心中思念、心中想法。『梁詩』六沈約『贈劉南郡季連』、『宴游忽永、心期靡悔』又軫指思念的对象、即友人・親朋。『心期』は友人、気心の知れた親友をいう。『心期』はもともと心から思い慕うこと、心の中の考えをいう。『梁詩』六沈約『贈劉南郡季連』の『宴游忽永、心期靡悔（宴游忽として永く、心期悔ゆる靡し）』はさらに転じて思い慕う対象、即ち友人、親友を指す。」と言う。

〔宴語〕酒を酌み交わしながら穏やかに談笑する。燕語、讌語とも。謝朓「扈中軍記室辞隋王牋」（『文選』四十）に「契闊戎旃、從容讌語。（戎旃に契闊し、讌語に從容す。）」とあり、李善注は『詩經』小雅・蓼蕭に「燕笑語兮、是以有誉処兮（燕して笑語す、是を以て誉処有り）」とあるのを引く。

7 休沐乃幽棲 8 別離未幾許

〔休沐〕官吏の休暇。鮑照「數」詩（『文選』三十。『古詩紀』六十二作「數名」詩）に「三朝國慶畢、休沐還旧邦（三朝國慶畢はり、休沐して旧邦に還る。）」とあり、李善注は『漢書』張安世伝に「（張）安世子字孺、用善書給事尚書、精力於職、休沐未嘗出。（安世子は子孺、用善書を用て尚書に給事し、力を職に精

め、休沐も未だ嘗て出でず。」とあるのを引く。また、『資治通鑑』漢孝昭皇帝上・始元三年に「初霍光与上官桀相親善、光每休沐出、桀常代光入决事。（初め霍光上官桀と相ひ親善し、光休沐して出づる毎に、桀常に光に代はり入りて事を決す。）」とあり、胡注に「漢制中朝官五日一下里舍休沐。（漢制中朝官は、五日に一たび里舍に下りて休沐す。）」とある。

「幽棲」隠者の暮らしをする。謝靈運「隣里相送方山」詩に「資此永幽棲、豈伊年歲別（此れに資りて永く幽棲せん、豈に伊れ年歳の別れならんや）」とある。

「別離」『楚辞』九歌・少司命に「悲莫悲兮生別離、樂莫樂兮新相知（悲しきは生別離より悲しきは莫し、樂しきは新相知より樂しきは莫し）」、「古詩十九首」其一にも「行行重行行、与君生別離（行き行きて重ねて行き行く、君と生別離す）」。

「幾許」どれほど、どれくらい。「古詩十九首」其十に「河漢清且淺、相去復幾許（河漢清く且つ淺し、相ひ去ること復た幾許ぞ）」とあり、謝朓「贈王主簿」詩二首『玉台』四（其二）に「余曲詎幾許、高駕且踟躕（余曲詎ぞ幾許ぞ、高駕且く踟躕す）」。

9 佇立日將暮 10 相思忽無緒

「佇立」いつまでもたたずんでいる。何遜「酬范記室雲」詩「佇立空為歎」【語釈】参照。

「日將暮」太陽が今にも沈みそうになる。『楚辞』離騷に

思はざらんや、君の門は以て九重なり」。

「不可越」向こう側に行くことができない。謝莊「月賦」に「臨風歎兮將焉歇、川路長兮不可越。（風に臨みて歎くこと將た焉くにか歇まん、川路長くして越ゆべからず。）」。

「三爵」三杯の酒。何遜「寄江州褚諮議」詩「無由奉三爵」【語釈】参照。

「何由」どうして〜することができようか。反語を表す。何遜「仰贈從兄興寧廣南」詩「何由綵奮飛」【語釈】参照。

【増新曲相對聯句】

【本文及び書き下し】

- | | | | | | |
|----------|-------------|------------|------|------|-----|
| 1 酒闌日隱樹 | 酒 | 闌 | にして日 | 樹に隠れ | |
| 2 上客請調絃 | 上客 | 絃を調へんことを請ふ | | | |
| 3 嬌人挾瑟至 | 嬌人 | 瑟を挟みて至るも | | | |
| 4 逶迤未肯前 | 逶迤として | 未だ肯て前まず | | | 劉孝勝 |
| 5 旧愛今何在 | 旧愛 | 今 何くにか在る | | | |
| 6 新声徒自憐 | 新声 | 徒らに自ら憐れむ | | | |
| 7 有曲無人聽 | 曲有るも | 人の聴く無く | | | |
| 8 徙倚高樓前 | 徙倚たり | 高樓の前 | | | 何澄 |
| 9 徘徊映日照 | 徘徊して | 日照に映じ | | | |
| 10 転側被風吹 | 転側して | 風吹を被る | | | |
| 11 徒為相思響 | 徒らに相思の響きを為し | | | | |
| 12 傷春君不知 | 春を傷むも君 | 知らず | | | 劉綺 |

「欲少留此靈瑣兮、日忽忽其將暮（少らく此の靈瑣に留まらんと欲するも、日忽忽として其れ將に暮れんとす）」。

「相思」相手のことを何度も何度も心に浮かべる。何遜「酬范記室雲」詩「相思不独慊」【語釈】参照。

「無緒」糸口が見付からない。何遜「送韋司馬別」詩「離思終無緒」【語釈】参照。

11 谿北映初星 12 橋南望行炬

「谿北」谷川の北側。詩題に「出谿辺望」とあった。六朝詩には他の用例は見当たらない。

「初星」日が沈む頃、薄暗くなった空に見えるようになったばかりの星。傅咸「与尚書同僚」詩に「曄曄初星、肅肅臣僕（曄曄たる初星、肅肅たる臣僕）」と見える他は六朝詩には用例が見当たらない。王融「詠池上梨花」詩に「芳春照流雪、深夕映繁星（芳春流雪を照らし、深夕繁星映ず）」。

「橋南」橋の南側。六朝詩には他の用例は見当たらない。「行炬」移「炬」は篝火、松明。六朝詩には他の用例は見当たらない。ここは川に浮かぶ漁り火と解した。

13 九重不可越 14 三爵何由奉

「九重」九重の門。転じて宮中をいう。天子の居処には九重の門があるとされたことから。『楚辞』九弁に「豈不鬱陶而思君兮、君之門以九重（豈に鬱陶として君を

- | | | | |
|----------|---------|-----------|---|
| 13 月昏樓上坐 | 月 | 昏くして樓上に坐し | |
| 14 含悲望別離 | 悲しみを含みて | 別離を望む | |
| 15 已切空牀怨 | 已だ切なり | 空牀の怨み | |
| 16 復看花柳枝 | 復た看る | 花柳の枝 | 遜 |

【日本語訳】

- | | |
|--------------------------------------|-------|
| 1 夕日が木々の向こう側に隠れ、酒宴がそろそろ終わろうとする頃になって、 | |
| 2 立派なお客様が弦楽器の演奏を所望された | |
| 3 艶やかな女性が瑟を小脇にやって来たけれど | |
| 4 ナヨナヨと恥じらってなかなか進もうとしない | （劉孝勝） |
| 5 むかし愛してくれた人は今いずこ | |
| 6 新しい曲もただ自分の心を動かすだけです | |
| 7 曲はあるけれど耳を傾けてくれる人はいません | |
| 8 高殿の前を行ったり来たりするばかり | （何澄） |
| 9 ウロウロと歩き回る姿を夕日に照らされ | |
| 10 行きかねて左右によじる身が風に吹かれます | |
| 11 ムダだと分かっているながら相思相愛の歌を歌い | |
| 12 春のもやもやとしたわたしの悲しみをあなたはご存知ないでしょう | （劉綺） |
| 13 高殿に座って帰らぬ人待つ我が身を照らす月は仄暗く | |
| 14 悲しみを抱いたまま別れた人のいる方を遠く眺めます | |
| 15 あまりにも身に迫るのです、他に誰もいない寢床のう | |

らみは
16春の訪れを知らせる花や柳の枝をもう一度見ることに
なるなんて (遜)

【校勘】

○『古詩紀』九十四。

無異同

【押韻】

「絃」「前」「憐」「前」、下平一先韻。「吹」「知」「離」「枝」、上平五支韻。

【語釈】

0 増新曲相對聯句

「増新曲」晋宋以降に長江流域で流行し、詩人たちが歌詞を作るようになった新しい楽曲。『宋書』樂志一に「吳哥雜曲、並出江東、晋宋以來、稍有増広。(吳哥雜曲、並びに江東に出で、晋宋以來、稍増広有り。)」。

「相對」向かい合う。楽曲名のはずだが、他に用例は見当たらない。漢・宋子侯「董嬌饒」に「花花自相對、葉葉自相當(花花 自ら相ひ對し、葉葉 自ら相ひ當たる。)」。

【劉孝勝】？。齊の文人劉繪の第五子、劉孝綽の弟。邵陵王蕭綸の法曹、湘東王蕭繹の安西記室、尚書左丞を歴任し、信義郡太守となったが、公務上の事件のた

めに免官された。後に尚書右丞に復帰し、散騎常侍を兼ねた。大同八(五四二)年、東魏へ使者として赴き、帰国すると武陵王蕭紀の安西長史・蜀郡太守となった。太清年間、侯景が建康を陥落させた際、蕭紀が蜀で帝位を称し、孝勝は尚書僕射となった。承聖二(五五三)年、蕭紀に随って江陵を攻撃したが、元帝の軍に敗れ捕らえられた。元帝は彼を許し、司徒右長史に任じた。晩年の事跡はよく分らない。現存する詩は五首。

【何澄】不詳。何思澄ではないかと思われる。四八三？～五三四？。字は元静。本貫は何遜と同じく東海郡郟県。若くして学問に努め、文辞に巧みだった。梁初、南康王蕭宝融の侍郎に起家し、天監六(五〇七)年、安成王蕭秀が江州刺史に遷ると、平南行参軍となり記室を兼ねた。この頃、「游廬山」詩を作って沈約に激賞された。天監十五年、勅命により『華林遍略』が編纂されることになると、徐勉に推薦されて編纂に携わった。その後、廷尉正、治書侍御史を歴任し、しばらくして秣陵県令に転じ、後に入朝して東宮通事舍人を兼ねた。舍人を兼ねたまま、湘東王蕭繹の下で安西録事参軍を勤め、やがて武陵王蕭紀の宣惠中録事参軍に任じられ、そのまま卒した。現存する詩は三首、いずれも『玉台新詠』に収める。その内「南苑逢美人」詩は何遜「南苑」詩の詩題【語釈】に引いた。また、何遜には「贈族人秣陵兄弟」詩がある。

【劉綺】不詳。何遜との聯句が残るのみ。『顔氏家訓』勉

【調絃】弦楽器を演奏する。鮑照「学古」詩に「調絃俱起舞、为我唱梁塵(絃を調へて俱に起ちて舞ひ、我が為に梁塵を唱ふ)」。

3 嬌人挾瑟至 4 逶迤未肯前

【嬌人】美しい女性。ここは妓女をいう。六朝詩には他の用例は見当たらない。

【挾瑟】瑟を抱える。「相逢行」古辞『玉台』一作「相逢狭路間」に「小婦無所為、挾瑟上高堂(小婦 為す所無く、瑟を挟みて高堂に上る)」(「為」、「玉台」作「作」)。

【逶迤】なよなよと歩く様。梁邵陵王蕭綸「車中見美人」詩『玉台』七に「語笑能嬌嬖、行步絶逶迤(語笑能く嬌嬖たり、行步 絶だ逶迤たり)」。

【未肯前】なかなか進もうとしない。梁武帝「子夜歌」二首『玉台』十。『樂府詩集』四十四作「晋宋齐辞」其一に「特愛如欲進、含羞未肯前(愛を待みて進まんと欲するが如く、羞を含みて未だ肯て前まず)」。

5 旧愛今何在 6 新声徒自憐

【旧愛】むかし愛した人。ここは昔の客をいう。曹植「雜詩」七首其七『玉台』二。張溥本作「閨情」、注云「一作『雜詩』」に「人皆棄旧愛、君豈若平生(人 皆な旧愛を棄つ、君 豈に平生の若くならんや)」。

【今何在】今はどこにいるのだろうか。何遜「贈韋記室

学に「梁世彭城劉綺、交州刺史勃之孫。早孤家貧、灯燭難辦、常買荻尺寸折之、然明夜読。孝元初出會稽、精選寮案、綺以才華為國常侍、兼記室。殊蒙礼遇、終於金紫光祿。(梁の世 彭城の劉綺、交州刺史勃の孫なり。早く孤となり家 貧しく、灯燭も辦じ難く、常に荻尺寸を買ひて之れを折り、然明して夜読す。孝元の初めて會稽に出づるや、寮案を精選し、綺 才華を以て國常侍と為り、記室を兼ね。殊に礼遇を蒙り、金紫光祿に終はる。)」とある他には記録が見当たらない。

1 酒闌日隱樹 2 上客請調絃

【酒闌】酒宴が間もなく終わろうとする。『史記』高祖本紀に「酒闌、呂公因目固留高祖。(酒 闌にして、呂公 因りて目し固く高祖を留む。)」とあり、『集解』は文穎の説を引き「闌言希也。謂飲酒者半罷半在、謂之闌。(闌 希を言ふなり。飲酒を飲む者 半ば罷み半ば在るを謂ひ、之れを闌と謂ふ。)」とする。また、簡文帝「大同八年秋九月」詩に「酒闌嘉宴罷、車騎各西東(酒 闌にして嘉宴 罷み、車騎 各おの西東す)」。

【日隱樹】夕日が樹木の向こう側に沈んでいく。江淹「雜體」詩三十首「劉太尉琨 傷亂」に「千里何蕭条、白日隱寒樹(千里 何ぞ蕭条たる、白日 寒樹に隠る)」。「上客」身分の高い客人。謝朓「夜聽妓」詩二首其二「上客光四座、佳麗直千金(上客 四座を光らし、佳麗 直千金)」。

「黯別」詩「促膝今何在」【語釈】参照。

「新声」新しく作られた歌曲。「古詩十九首」其四に「彈箏奮逸響、新声妙入神（箏を弾じて逸響を奮ひ、新声妙なること神に入る）」。

「徒自憐」自分自身を虚しく可哀想に思う。范雲「望織女」詩に「盈盈一水辺、夜夜空自憐（盈盈たり 一水の辺、夜夜 空しく自ら憐れむ）」。

7 有曲無人聴 8 徙倚高樓前

「有曲」楽曲は流れているのに。この意味では六朝詩には他の用例は見当たらない。

「無人聴」わざわざ耳を傾けてくれる者は誰もいない。後の例だが隋・孔德紹「夜宿荒村」詩に「撫絃無人聴、対酒時独斟（絃を撫するも人の聴く無く、酒に対するも時に独り斟む）」。

「徙倚」当てもなく彷徨う。疊韻。何遜「日夕出富陽浦口和朗公」詩「徙倚空望歸」【語釈】参照。

「高樓」たかどの。遠く旅に出た恋人を思う女性の住居として描かれる。「古詩十九首」其五に「西北有高樓、上与浮雲齊（西北に高樓有り、上は浮雲と齊し）」とあり、曹植「七哀」詩に「明月照高樓、流光正徘徊。上有愁思婦、悲歎有余哀（明月 高樓を照らし、流光正に徘徊す。上に愁思の婦有り、悲歎して余哀有り）」。

9 徘徊映日照 10 転側被風吹

「傷春」春の訪れによって生じる悲しみ。『楚辞』招魂に「目極千里兮傷春心、魂兮归来哀江南（目 千里を極めて春心を傷ましめ、魂 帰りに来たり江南を哀しむ）」とあり、沈約に「傷春」詩がある。

「君不知」あなたはご存知ない。『楚辞』九弁に「專思君兮不可化、君不知兮可奈何（専ら君を思ふも化すべからず、君の知らざるを奈何すべき）」とあり、鮑照「代鳴雁行」に「憔悴容儀君不知、辛苦風霜亦何為（憔悴せる容儀も 君 知らず、辛苦 風霜も亦た何をか為さん）」。

13 月昏楼上坐 14 含悲望別離

「月昏」月が明るくない。六朝詩には他の用例は見当たらない。

「楼上」高殿。「古詩十九首」其二に「盈盈楼上女、皎皎当窗牖（盈盈たり 楼上の女、皎皎として窓牖に当たる）」と見えるように、月に照らされる美しい女性が住まう場所。

「含悲」胸中に悲しみを懐く。何遜「和蕭諮議岑離閨怨」詩「含悲下翠帳」【語釈】参照。

「望別離」別れた人を遠くから眺めやる。「別離」、常見の語だが、ここは別れた人を指す。何遜「送韋司馬別」詩「望別上高樓」【語釈】参照。

15 已切空牀怨 16 復看花柳枝

「徘徊」さまよう様。疊韻。何遜「送韋司馬別」詩「徘徊落日晩」【語釈】参照。

「映日照」日の光に照らされる。曹植「雜詩」七首其一に「高台多悲風、朝日照北林（高台 悲風多く、朝日北林を照らす）」とあり、謝朓「秋竹曲」に「從風既裊裊、映日頗離離（風に従ひて既に裊裊として、日に映じて頗る離離たり）」。また、梁・褚縝「詠柰」詩に「映日照新芳、叢林抽晩蒂（映日 新芳を照らし、叢林 晩蒂抽す）」。

「転側」眠れぬ夜を寝返りを打ちながら過ごすという意味で用いられたり、徘徊、逍遙と同じく行く当てもなく彷徨う様を表したりするが、ここは身をよじる。「詠照鏡」詩（『玉台』五）に「对影独含笑、看花時転側（影に対して独り笑ひを含み、花を見て時に転側す）」（「独」、『玉台』作「空」）。

「被風吹」風に吹かれる。「風吹」は梁簡文帝「從頓暫還城」詩に「日照蒲心暖、風吹梅蕊香（日は蒲心を照らして暖かく、風は梅蕊を吹きて香し）」。

11 徒為相思響 12 傷春君不知

「徒為」ムダにゝとなる、になる。袁淑「効古」詩に「勤役未云已、壯年徒為空（勤役 未だ云に已まず、壯年徒らに空と為る）」。

「相思」相手のことを何度も何度も心に浮かべる。何遜「酬范記室雲」詩「相思不独憶」【語釈】参照。

「已切」あまりにも切実である。劉孝綽「酬陸長史倕」詩に「已切臨晚情、遽動思歸引（已だ切なり 臨晚の情、遽かに動く 思歸の引）」。

「空牀」他に誰もいない寝台。「古詩十九首」其二に「蕩子行不歸、空牀難独守（蕩子 行きて帰らず、空牀独り守り難し）」。

「花柳」花と柳。六朝では何遜以前の用例は見当たらない。

「照水聯句」

【本文及び書き下し】

- | | |
|---------|--------------|
| 1 插花行理鬢 | 花を挿し 行きて鬢を理め |
| 2 遷延去復歸 | 遷延し 去りて復た歸る |
| 3 雖憐水上影 | 水上の影を憐れむと雖も |
| 4 復恐濕羅衣 | 復た恐る 羅衣を湿すを |
| 5 臨橋看黛色 | 橋に臨みて黛色を看 |
| 6 映渚媚鉛暉 | 渚に映して鉛暉を媚ぶ |
| 7 不顧春荷動 | 春荷の動くを顧みざるも |
| 8 彌畏小禽飛 | 彌いよ畏る 小禽の飛ぶを |

【日本語訳】

- | | |
|---------------------------|---------------|
| 1 髪に花を挿し、 | 水辺に行つては鬢の毛を整え |
| 2 後ずさつて水辺から離れたかと思うと、 | また元の場所に帰っていく |
| 3 水に映る自分の姿に心惹かれて覗いてみていたのに | |

4 薄絹の裳裾が濡れないかとビクビクしているのだろう

5 橋のたもとで水に映る眉墨の青黒色を見つめ (遜)

6 水際に輝くような白粉の白さを水面に近付けてみる

7 春のハスが揺れ動くのは気にならないけれども

8 水面を覗き込む自分に気が付くかもしれない人の姿に驚いて小さな鳥が飛び立つのは心配なのだろう (綺)

【校勘】

○『古詩紀』九十四。

無異同

【押韻】

「帰」「衣」「暉」「飛」、上平八微韻。

【語釈】

0 照水聯句

「照水」水面に映す、映る。蕭子顯「代美女篇」(『玉台』八)に「繁穠既為李、照水亦成蓮(繁穠はんじようなること既に李を為し、水を照らして亦た蓮を成す)」とあるように、美しい女性が水面に姿を映す様子。

「綺」「増新曲相對聯句」にも見えた劉綺だろう。

1 插花行理鬢 2 遷延去復歸

「插花」髪に花、或いは花簪を挿す。謝朓「雜詠」詩三

首「鏡台」(『謝宣城集』作「詠鏡台」、『玉台』四作「鏡台」)に「照粉しやうふ紅粧、插花しやうは理雲髮うんぱつ(粉を照らして紅粧を払ひ、花を挿して雲髪を理む)」「(理)、『玉台』作「理」とよく似た句が見える。

「理鬢」鬢の毛を梳つて整える。嵇康「養生論」(『文選』五十三)に「勁刷理鬢、醇醴じゆんれい發顏。(勁刷 鬢を理め、醇醴 顔に発す。)」とある。また、王僧孺「春閨有怨」詩に「愁来不理鬢、春至更攢眉あつ(愁ひ 来たりて鬢を理めず、春 至りて更に眉を攢む)」。

「遷延」退く。疊韻。宋玉「神女賦」(『遷延引身、不可親附。(遷延して身を引き、親附すべからず。)」とあり、謝朓「三日侍華光殿曲水宴代人應詔」詩十章其九に「弱腕纖腰、遷延妙舞(弱腕 纖腰、遷延して妙舞す)」。

「復歸」元に戻る。江淹「雜體」詩三十首「謝僕射混遊覽」に「卷舒雖万緒、動復歸有靜(卷舒 万緒なりと雖も、動きて復た有靜に歸す)」とあり、李善注は『老子』に「夫物芸芸、各歸其根。歸根曰靜、是謂復命。(夫れ物は芸芸たるも、各おの其の根に歸る。根に歸るを靜と曰ひ、是れを命に復ると謂ふ。)」(李善注、「芸芸」作「云云」、「各」作「復」。王弼注『老子』、「各」下有「復」字)とあるのを引く。

3 雖憐水上影 4 復恐濕羅衣

「雖」復恐」〜ではあるけれども。梁武帝「夏歌」四首(『玉台』十)其三に「雖欲持自親、復恐不甘口(親、

『玉台』作「新」)。

「水上影」水面に映るシルエット。宋・無名氏「讀曲歌」八十九首其八十五に「譬如水上影、分明不可得(譬ふれば水上の影の如く、分明なるも得べからず)」。

「濕羅衣」薄絹の衣が濡れてしまう。劉孝威「都県遇見人織率爾寄婦」詩(『玉台』八)に「夢啼漬花枕、覺淚濕羅巾(夢啼 花枕を漬し、覺淚 羅巾を湿す)」とあり、庾信「和宇文内史春日遊山」詩に「風逆花迎面、山深雲濕衣(風 逆らひて花 面を迎へ、山 深くして雲衣を湿す)」。

5 臨橋看黛色 6 映渚媚鉛暉

「臨橋」橋を目の前にする。梁以前の詩には見当たらない。

「黛色」眉を描くのに用いる墨の青黒色。鮑照「登大雷岸与妹書」に「半山以下、純為黛色。(半山より以下、純て黛色為り。)」と見えるが、六朝詩には他の用例は見当たらない。

「映渚」水際に映す。謝靈運「山居賦」に「枇杷林檎、帶谷映渚。(枇杷 林檎、谷を帯び渚に映ず。)」とあるが、六朝詩には他の用例は見当たらない。

「媚」相手の気をひき、側に寄る。謝靈運「過始寧墅」詩に「白雲抱幽石、綠篠媚清漣(白雲 幽石を抱き、緑篠 清漣に媚ぶ)」。

「鉛暉」白粉の輝くような白さ。六朝詩には他の用例は

見当たらないが、鉛黛の語が王融「法樂辭」十二章其十に「閨中屏鉛黛、闕下挂纓簪(閨中 鉛黛を屏おほひ、闕下 纓簪を挂く)」と見え、鉛華が曹植「洛神賦」に「芳沢無加、鉛華弗御。(芳沢 加ふる無く、鉛華 御せず。)」とあり、李善注は『楚辭』大招に「粉白黛黑、施芳沢只(粉 白く 黛 黒くして、芳沢を施す)」とあるのを引き、『博物志』を引いて「燒鉛成胡粉。(鉛を燒きて胡粉を成す。)」とする。

7 不顧春荷動 8 彌畏小禽飛

「不顧」気にしない、心配しない。陸雲「為顧彦先贈婦往返」詩四首其三に「美目逝不顧、纖腰徒盈盈(美目 逝かして顧みず、纖腰 徒らに盈盈たり)」。

「春荷動」「春荷」は春のハス。吳均「吳城賦」に「不見春荷夏槿、唯聞秋蟬冬蝶。(春荷 夏槿を見ず、唯だ聞く 秋蟬 冬蝶。)」とあるが、六朝詩には他の用例は見当たらない。「荷動」は謝朓「遊東田」詩に「魚戲新荷動、鳥散余花落(魚 戯れて新荷 動き、鳥 散じて余花 落つ)」。

「彌畏」ますますこわがる。六朝詩には他の用例は見当たらない。何遜「与建安王謝秀才牋」に「彌畏友朋。(彌いよ友朋を畏る。)」。

「小禽」ここは小さな鳥。語は『周礼』夏官・大司馬に「大獸公之、小禽私之、獲者取左耳。(大獸は之れを公にし、小禽は之れを私にし、獲る者 左耳を取る。)」

と見えるが、こちらは小さな獣や鳥の総称。六朝詩には他の用例は見当たらない。

(綺)

【折花聯句】

【本文及び書き下し】

- 1 笑出春園裏 笑ひて春園の裏に出で
- 2 望花聯褰纈 花を望み聯ねて褰纈す
- 3 欲以間珠鈿 「以て珠鈿に間へんと欲す
- 4 非為相思折 相思の為に折るに非ず」 遜
- 5 日照爛成綺 日照らし 爛(かがや)きて綺を成し
- 6 風来聚疑雪 風 来たり 聚まりて雪かと疑ふ
- 7 試采一枝帰 「試みに一枝を采りて帰らん
- 8 願持因遠別 持せんことを願ふは遠別に因る」 綺

【日本語訳】

- 1 笑いながら部屋から出て春の庭園に足を運び
- 2 花を見上げながら手を休めず次々に手折りました
- 3 「真珠で飾ったかんざしで花を挟んでみたかっただけで
- 4 恋人に贈るために摘んだではありません」 (遜)
- 5 お日様が花を照らすとキラキラとあや絹のように輝き
- 6 風が吹いて来ると一所に集まってまるで雪のようです
- 7 「一枝だけ摘んで持ち帰ろうと思います
- 8 花を手にしたいと願ったのは、本当は遠くに行つて別れ別れになったあの人に贈りたいからなのです」

【校勘】
○『古詩紀』九十四。
無異同

【押韻】

「纈」、入声十六屑韻。「折」「雪」「別」、入声十七薛韻。
屑・薛同用。

【語釈】

0 折花聯句

【折花】花を手折つて贈り物にする。「古詩十九首」其六に「涉江采芙蓉、蘭沢多芳草。采之欲遺誰、所思在遠道(江を涉りて芙蓉を采る、蘭沢 芳草多し。之れを采りて誰にか遺らんと欲する、思ふ所は遠道に在り)」とあり、李善注は『楚辭』九歌・山鬼に「被石蘭兮帶杜衡、折芳馨兮遺所思(石蘭を被て杜衡を帶とし、芳馨を折りて思ふ所に遺らん)」とあるのを引く。梁・劉孝威「擬古応教」詩(『玉台』九)に「誰家妖冶折花枝、蛾眉暖睇使情移(誰が家の妖冶か花枝を折り、蛾眉暖睇 情をして移らしむ)」。

1 笑出春園裏 2 望花聯褰纈

【笑出】笑いながらくから出て行く。六朝詩には他の用

例は見当たらないが、梁武帝「子夜四時歌」秋歌四首其一に「懷情入夜月、含笑出朝雲(情を懷きて夜月に入り、笑ひを含みて朝雲に出づ)」(「懷情」、『玉台』作「情懷」)。

【春園】春の庭園。晋・無名氏「子夜四時歌」春歌二十首其十四に「春園花就黃、陽池水方淥(春園 花 就ち黄に、陽池 水 方に淥し)」とあるが、梁代以前の詩の用例は少ない。

【望花】花を遠くから眺める。蕭子顯「春閨思」詩に「春度人不歸、望花尽成葉(春 度るも人 歸らず、花の尽く葉を成すを望む)」と見えるが、梁代以前の詩には見当たらない。

【褰纈】つまむ、つまみとる。六朝詩には他の用例は見当たらない。「褰」は褰に通じ、謝靈運「山居賦」に「愚仮駒以表谷、涓隱巖以攀芳(愚は仮駒を仮りて以て谷を表し、涓は巖に隠れて以て芳を攀る。)」と攀芳の語が見える。「纈」は纈、謝朓「同詠坐上所見一物・席」詩に「遇君時採擷、玉座奉金卮(君の時に採擷するに遇ひて、玉座に金卮を奉ず)」と採擷の語が見える。

3 欲以間珠鈿 4 非為相思折

【欲以】くしたいと思う。任昉「出郡伝舎哭范僕射」詩三章(『文選』二十三) 其一に「将乖不忍別、欲以遣離情(将に乖れんとして別るるに忍びず、以て離情を遣らんと欲す)」。

【間】間に挟み込む。曹植「美女篇」に「明珠交玉体、珊瑚間木難(明珠 玉体に交はり、珊瑚 木難に間はる)」。【珠鈿】真珠を嵌め込んだ花簪。六朝詩には他の用例は見当たらない。

【非為】くのためではない。江淹「雜体」詩三十首「鮑參軍昭 戎行」に「殉義非為利、執羈輕去鄉(義に殉ひて利の為にするに非ず、羈を執りて軽く郷を去る)」。

【相思】相手のことを何度も何度も心に浮かべる。何遜「酬范記室雲」詩「相思不独慊」【語釈】参照。ここはそのような相手。

5 日照爛成綺 6 風来聚疑雪

【日照】太陽が照らす。曹植「雜詩」七首其一に「高台多悲風、朝日照北林(高台 悲風多く、朝日 北林を照らす)」。

【爛】光が四方を照らす様。爛漫に同じ。謝靈運「擬魏太子鄴中集詩」八首・魏太子「照灼爛霄漢、遙裔起長津(照灼として霄漢に爛き、遙裔として長津を起こす)」。

【成綺】美しい模様を織り出した絹のようになる。謝朓「晚登三山還望京邑」詩に「余霞散成綺、澄江静如練(余霞 散じて綺を成し、澄江 静にして練の如し)」。

【風来】風が吹いて来る。謝朓「詠竹」詩に「月光疎已

密、風来起復垂（月光 疎にして已に密に、風 来たるや 起ちて復た垂る）。

「疑雪」まるで雪のように思われる。「疑」はゝのようだ。庾肩吾「奉和春夜応令」詩に「月皎疑非夜、林疏似更秋（月 皎くして夜に非ざるかと疑ひ、林 疏らにして秋に更はりたるに似る）」とあり、王運路前掲書に「以上諸例『疑』是覺得、以為的意思、故多与『謂』『覺』『見』『見』等詞相對應。『疑』有如同、好像義、也是主觀上的感覺、因而与覺得・以為義本質上是一致的。（以上の諸例の『疑』は覺得（ゝではないかと思う）、以為（ゝだと見做す）の意味なので、しばしば『謂』『覺』『見』などの語と対応する。『疑』には如同（ゝのようなものである）、好像（まるでゝのようなものである）の意味があるが、やはり主觀的な感覺であるために、覺得・以為の意味と本質的に一致する）」。

7 試采一枝帰 8 願持因遠別

「試采」ちよつと摘み取つてみる。陳・傅綽「採桑」に「羅敷試採桑、出入城南傍（羅敷 試みに桑を採り、城南の傍らに出入す）」とあるが、他の用例は見当たらない。

「一枝」一本の枝。梅の花をいう。『太平御覽』十九に引く宋・盛弘之『荊州記』に「陸凱与范曄為友、在江南寄梅花一枝、詣長安与曄、并贈詩云、『折梅逢驛使、寄与隴頭人、江南無所有、聊贈一枝春』。（陸凱 范曄と

友為り、江南に在りて梅花一枝を寄せ、長安に詣りて曄に与へ、并びに詩を贈りて云ふ、『花を折つて驛使に逢ひ、隴頭の人に寄与す。江南 有る所無く、聊か贈る 一枝の春』）」と見える故事に拠る。

「願持」手に取りたい。吳均「贈周興嗣」詩四首其一に「願持江南蕙、以贈生芻人（願はくは江南の蕙を持して、以て生芻の人に贈らんことを）」。

「遠別」遠いところに行つてしまつた人との別れ。「李陵録別詩」二十一首其六に「黃鵠一遠別、千里顧徘徊（黃鵠 一たび遠く別れ、千里 顧みて徘徊す）」。

「揺扇聯句」

【本文及び書き下し】

- | | | |
|---------|-----------------|------|
| 1 紈扇已新製 | 紈扇 | 已に新製 |
| 2 蕩婦復新粧 | 蕩婦 | 復た新粧 |
| 3 欲掩羞中笑 | 羞中の笑ひを掩はんと欲し | |
| 4 還飄袖裏香 | 還た袖裏の香を 飄す | 遜 |
| 5 在握時揺動 | 握に在りては時に揺動し | |
| 6 当歌掩抑揚 | 当に歌ふべきときには掩に抑揚す | |
| 7 誰云滅羅袂 | 誰か云ふ 羅袂減ると | |
| 8 影日聊自障 | 影日 聊か自ら障らん | 綺 |

【日本語訳】

- 1 白いシルクの扇は作られたばかり
2 妓楼の美しい女性もお化粧を終えたばかり

- 3 はにかみながら扇で口元を隠そうとすると
4 袖に焚きしめた香りが周囲に広がりました（遜）
5 握った手の中にあると、その時その時に揺れ動き
6 歌を口ずさむと、メロディの抑揚といっしょに上がったり下がったり
7 薄絹の袖がすべり落ちることなど気にしなくとも
8 扇が日の光を遮ってくれますから（綺）

【校勘】

○『古詩紀』九十四。

7 「羅」、薛本作「衣」。

【押韻】

「粧」「香」「揚」、下平十陽韻。「障」、去声四十一漾韻。

【語釈】

0 揺扇聯句

「揺扇」扇であおぐ。班婕妤「怨歌行」を踏まえ、寵愛を失った女性の動作として描かれることが多い。梁元帝「戲作艶」詩（『玉台』七）に「揺茲扇似月、掩此淚如珠（茲の扇の月に似たるを揺り、此の涙の珠の如きを掩ふ）」。

1 紈扇已新製 2 蕩婦復新粧

「紈扇」白い練り絹で作った扇。江淹「雜体」詩三十首

「班婕妤 詠扇」に「紈扇如团月、出自機中素（紈扇 团月の如し、機中の素より出づ）」とあり、李善注は

班婕妤「怨歌行」に「新裂齊紈素、皎潔如霜雪。裁為合歡扇、团团似明月（新たに齊の紈素を裂けば、皎潔 霜雪の如し。裁ちて合歡扇と為せば、团团として 明月に似る）」（「裂」、李善注作「製」とあるのを引く）。

「已」復…ゝあるばかりでなく…でもある。謝朓「夜聽妓」詩二首其二に「蛾眉已共笑、清香復入襟（蛾眉 已に共に笑ひ、清香 復た襟に入る）」。

「新製」作つてから間もない。李善注が引く班婕妤「怨歌行」「新裂齊紈素、皎潔如霜雪」、「裂」を「製」に作る。

「蕩婦」歌舞を生業とする女性。「倡婦」のこと。梁簡文帝「執筆戲書」詩（『玉台』七）に「舞女及燕姬、倡樓復蕩婦（舞女 及び燕姬、倡樓 復た蕩婦）」。

「新粧」お化粧をしたばかり。梁代以降に見られるようになる。劉孝威「都京遇見人織率爾寄婦」詩に「新粧莫点黛、余還自画眉（新粧 黛を点する莫かれ、余 還りて自ら眉を画かん）」。

3 欲掩羞中笑 4 還飄袖裏香

「欲」還…ゝしようとしていたのに、…することになつた。梁簡文帝「採桑」に「欲知琴裏意、還贈錦中文（琴裏の意を知らんと欲して、還た贈る 錦中の文）」。

「掩羞中笑」恥じらいを含んで笑った口元を扇で覆い隠す。「掩く笑」、何遜「苑中見美人」詩「復持掩余笑」【語釈】参照。「羞中笑」、六朝詩には他の用例は見当たらない。

「飄袖裏香」袖中の香りを扇によって生じた風がただよわせる。「飄く香」、梁簡文帝「葉名」詩に「燭映合歡被、帷飄蘇合香」(燭は合歡の被に映じ、帷は蘇合の香に飄る)とある。「袖裏香」、劉孝綽「賦得遺所思」詩(『玉台』八)に「所思不可寄、唯憐盈袖香(思ふ所は寄すべからず、唯だ憐れむ 袖に盈つるの香を)」。

5 在握時揺動 6 当歌掩抑揚

「在握」握った手の中にある。『宋書』桂陽王休範伝に「王奐佐郢、兵權在握。(王奐 郢に佐たり、兵權 握に在り。)」と見えるが、六朝詩には他の用例は見当たらない。

「揺動」揺れる。曹丕「迷迭香賦」に「随迴風以揺動兮、吐芳氣之穆清。(迴風に随ひて以て揺動し、芳氣の穆清たるを吐く。)」と見えるが、六朝詩には他の用例は見当たらない。

「当歌」歌う。語は曹操「短歌行」に「對酒當歌、人生幾何(酒に対して当に歌ふべし、人生 幾何ぞ)」とあるのに基づく。王雲路前掲書に「『当歌』即唱歌。『当歌』は、歌うである。」という。

「掩く」といっしょに。同意。『荀子』富国に「使民必

流れて浪浪たり。」と見える。やはり美しい女性の衣裳。

「影日」日の光。景日に同じ。応場「楊柳賦」に「三春條其奄過、景日赫其垂光。(三春 條として其れ奄過し、景日 赫として其れ光を垂る。)」と見えるが、六朝詩には他の用例は見当たらない。

「自障」さえぎつてくれる。『釈名』釈衣服に「下日裳。裳、障也。所以自障蔽也。(下を裳と曰ふ。裳は、障なり。自ら障蔽する所以なり。)」。

「正釵聯句」

【本文及び書き下し】

- | | | |
|---------|----|---------------|
| 1 竹台帰欲礙 | 竹台 | 帰らんとすれば礙げんと欲し |
| 2 花林出未通 | 花林 | 出でんとすれも未だ通ぜず |
| 3 度簪先分影 | 度簪 | 先づ影を分かち |
| 4 転珥忽瞻風 | 転珥 | 忽ち風を瞻る |
| 5 双橋耀宝鈿 | 双橋 | 宝鈿耀やき |
| 6 闌闌密復叢 | 闌闌 | 密にして復た叢まる |
| 7 羞令挂纓闌 | 纓闌 | に挂けしむるを羞ぢ |
| 8 整挿補余空 | 整 | 挿して余空を補ふ |
- 綺

【日本語訳】

1 竹製の髪飾りは元の場所に戻そうとしてもうまく戻らないし

2 花のように色鮮やかな櫛はなかなか通らないようだ

勝事、事必出利、利足以生民、皆使衣食百用出入相掙(民をして必ず事に勝へ、事 必ず利を出だし、利以て民を生ずるに足らしめ、皆な衣食百用をして出入相ひ掙じからしむ。))とあり、王先謙「集解」は王念孫の説を引いて『爾雅』曰、『弇、同也。』『方言』曰、『掩、同也。』『周頌』執競伝曰、『奄、同也。』『奄・掩・揜・揜並通。』『爾雅』に曰く、『弇、同なり』と。『方言』に曰く、『掩、同なり』と。『周頌』執競の伝に曰く、『奄、同なり』と。弇・奄・掩・揜 並びに通ず。』という。第3句「掩羞中笑」とは異なる意味で用いて表現上の工夫としたのだろう。

「抑揚」上がったたり下がったりする。潘岳「笙賦」に「応吹噏往来、随抑揚以虚滿。(吹噏に応じて以て往来し、抑揚に随ひて以て虚滿す。)」とあるようにメロディの抑揚を表すが、ここは扇の動きも兼ねていう。

7 誰云減羅袂 8 影日聊自障

「誰云」くだろうか、いや、くではない。反語を表す。晋・張載「七哀」詩二首(『文選』二十三) 其二に「憂来令髮白、誰云愁可任(憂ひ 来たりて髪をして白からしむ、誰か云ふ 愁ひ 任ふべしと)」。

「減」下がる。ここは扇であおいでいる内に袖が肘まで垂れ下がってしまったことをいう。

「羅袂」薄絹の袖。曹植「洛神賦」に「抗羅袂以掩涕兮、淚流襟之浪浪。(羅袂を抗げて以て涕を掩ひ、涙 襟に

3 根本までしっかりと挿した二股のかんざしは、先で分かれてそれぞれがキラリと光り

4 首を振るのに合わせてクルリと回ったみみだまは、風に吹かれたかのように見える (遜)

5 双子の橋のような形をした花かんざしがキラリと光る 6 びっしりと密集した豊かな黒髪の中で

7 首に掛けた飾り紐の切れ目に引っ掛かっているのが恥ずかしくて

8 かんざしをきちんと挿し直して髪の毛の隙間を掩おうとしている (綺)

【校勘】

○『古詩紀』九十四。

7 「挂」、薛本作「桂」。『詩紀』注云「集作『桂』」。底本注云「一作『桂』」。

【押韻】

「通」「風」「叢」「空」、上平一東韻。

【語釈】

0 正釵聯句

「正釵」かんざしをきちんと直す。「釵」は二股になったかんざし。梁・費昶「詠照鏡」詩(『玉台』六)「正釵時念影、払絮且憐香(釵を正して時に影を念ひ、絮を払ひて且く香を憐れむ)」。

1 竹台帰欲礙 2 花林出未通

「竹台」竹で作った平らな台座の形をした髪飾り。次の「花林」からすると櫛をいうかもしれない。詩題「正釵」から推したが、六朝詩には他の用例は見当たらない。筭

「帰欲礙」元の場所に戻そうとしてもうまく戻らない。

「正釵」から推した。

「花林」色鮮やかな林。劉孝綽「詠百舌」詩に「山人惜春暮、旭旦坐花林（山人 春暮を惜しみ、旭旦 花林に坐す）」と見えるが、ここは美しい櫛状の髪飾りをいうのではないかと解した。

「出未通」ここは櫛がうまく通らない。「未通」は鮑照「從拜陵登京峴」詩に「晨登峴山首、霜雪凝未通（晨に峴山の首に登り、霜雪 凝りて未だ通ぜず）」。

3 度簪先分影 4 転珥忽瞻風

「度簪」しつかり根本まで挿したかんざし。「度」は端から端まで通す。六朝詩には他の用例は見当たらない。

「分影」かんざしが二股になっているので、光が分かれる。梁元帝「夕出通波閣下觀妓」詩（『詩紀』題下注云「一云『春夜看妓』」）に「竹密無分影、花疏有異香（竹密にして分影無く、花 疏にして異香有り）」。

「転珥」頭の動きに合わせてクルリと回るみみだま。かんざしの位置を落ち着かせるために頭を軽く振ってみ

た様子。六朝詩には他の用例は見当たらない。「瞻風」風を感じる。これも六朝詩には他の用例は見当たらない。

5 双橋耀宝鈿 6 闔闔密復叢

「双橋」二つ一揃いになった橋。二股になったかんざしの形をいうのだろう。六朝詩には他の用例は見当たらない。

「宝鈿」真珠や金、玉などで飾った花かんざし。六朝詩には他の用例は見当たらないが、「折花聯句」に「珠鈿」の語が見えた。

「闔闔」数が多い様。ここは女性の髪が豊かなことをいうと思うが、六朝詩中の「闔闔」は車が行き交う音など、音が大きい様を表現する場合が多い。

「密復叢」草むらのようにビッシリと生えている。

7 羞令挂纓闕 8 整挿補余空

「羞令」くんにさせておくことが気恥ずかしい。劉孝綽

「賦得照棋燭詩刻五分成」詩（『玉台』八）に「不辭纖手倦、羞令夜向晨（纖手の倦むを辞せず、夜をして晨に向かはしむるを羞づ）」、梁簡文帝「晚景出行」詩（『玉台』七）に「羞令白日暮、車騎鬱相望（白日をして暮れしむるを羞ぢ、車騎 鬱として相ひ望む）」（「騎」、「玉台」作「馬」と）。

「挂纓闕」色とりどりの絹の紐の隙間に引つ掛ける。「纓」

は婚約した女性が首に飾る絹の紐。『儀礼』士昏礼に「主人入、親説婦之纓。（主人 入りて、親ら婦の纓を説く。）」とあり、鄭玄注に「婦人十五許嫁、笄而礼之、因著纓、明有繫也、蓋以五采為之。（婦人 十五にして許嫁すれば、笄して之れを礼し、因りて纓を著く、明らかに繫ぐ有るなり、蓋し五采を以て之れを為る。）」とあって、腰に帯びるもののようだが、ここは「正釵」から冠の紐のイメージと重ねたと解した。王融「法楽辞」十二章其十に「閨中屏鉛黛、闕下挂纓簪（閨中に屏鉛黛を屏け、闕下に纓簪を挂く）」とある。「挂」は引つ掛ける。「闕」は欠落した部分。「纓闕」、六朝詩には他の用例は見当たらない。

「整挿」きちんと挿す。「正釵」をいう。六朝詩には他の用例は見当たらない。

「余空」隙間。これも六朝詩には他の用例は見当たらない。

「賦詠聯句」

【本文及び書き下し】

- 1 弊履常決踵 弊履 常に踵を決し
- 2 眉高起半額 眉 高くして半額に起つ
- 3 曼倩爾何為 曼倩 爾 何をか為す
- 4 独歎長安索 独り長安に索むるを歎く
- 5 工商既慙巧 工商 既に巧みなるを慙ぢ
- 6 農士聊相易 農士 聊か相ひ易ふ

遜

7 蝮腹有余資

蝮腹 余資有り

8 鴻肩方可拍

鴻肩 方に拍つべし

江革

9 撰職婉握蘭

職を撰して蘭を握るを婉ぢ

10 濫官悲執戟

官を濫りにして戟を執るを悲しむ

11 連章既不敏

連章 既に敏ならず

孺

12 高談豈能劇

高談 豈に能く劇からんや

13 逸翮任奮飛

逸翮 奮飛に任せ

14 窘步事羈勒

窘步 羈勒を事とす

15 還鳥余能繫

還鳥は余 能く繫ぐも

革

16 流言爾無惑

流言は爾 惑ふ無かれ

17 憂懷乃千載

憂懷は乃ち千載

18 永權常數刻

永權は常に數刻

19 直是悲別離

直だ是れ別離を悲しむのみにして

20 非閑念通塞

通塞を念ふに閑するに非ず

遜

21 日照汀沙素

日照 汀沙 素く

22 山影波浪黑

山影 波浪 黒し

23 爾限大江南

爾は大江の南に限られ

24 余歸茂陵北

余は茂陵の北に歸せん

孺

【日本語訳】

- 1 地方でのお役所勤めはボロ靴を履くといつも踵が出るような貧乏暮らし
- 2 都で太い眉が流行ると地方では額に半ばするほど太く描くとか
- 3 東方朔はいつたいたまどうして

4 長安にいながら安月給を歎いたのでしよう (遜)
 5 己の小器用さを気恥ずかしく思う職人や商人にはなりたくないですから
 6 農民を辞めて取り敢えず仕官することにしました
 7 モグラのようなちっぽけな腹ではほんの僅かな食事でもありあまるご馳走になってしまいましたから
 8 仙人である洪涯の肩を今なら親しげにたたくことができます (江革)
 9 官職に就くにしても天子の側近となるのは気恥ずかしいことでしょう
 10 役人になるにしても護衛官でしかないのは悲しいことでしょう
 11 こうして聯句の場に参加させて頂いても、わたしはあまり賢くありませんし
 12 高踏な議論をしようにも流暢に話すことができません (孺)
 13 空を飛ぶ鳥は自由気儘に飛び回ることができませんが
 14 駿馬は面懸を着けられ束縛されてしまうのです
 15 埒に帰る鳥のように故郷に帰ろうとしているわたしであれば出仕しなくてもすみましょう
 16 どうかあなたは根も葉もない噂に惑わされませぬよう (革)
 17 寂しく悲しい思いは千年も続きますが
 18 詩を作って思いを述べあう楽しみはほんの数刻のみ
 19 今はただ互いが別れ別れになるのが悲しいだけのこと

20 それぞれの順境や逆境のことを考えたせいではありません (遜)
 21 日の光のために水際の砂が白かったのに
 22 山の陰のために波が黒々と見えます
 23 あなたは長江の南の地に隔てられ
 24 わたしは都の北の地に帰ります (孺)

【校勘】
 ○『古詩紀』九十四。
 6 「士」、張紘本作「仕」。
 8 「肩」、張燮本作「眉」。

【押韻】
 「額」「索」「拍」「戟」「劇」、入声二十陌韻。「易」、入声二十二昔韻。陌・昔同用。「勒」「惑」「刻」「塞」「黒」「北」、入声二十五德韻。

【語釈】
 0 賦詠聯句
 「賦詠」題を分け合つて詩を作る。賦得とほぼ同じ意味。吳兆宜本『玉台』八に劉孝綽の「賦詠得照棋燭刻五分成」詩を収めるが、紀容舒『考異』は「詠」を衍字とする。梁簡文帝には「賦詠五陰識枝」との作がある。詩題には明示されないが、それぞれ出処進退について詠じているようである。

「江革」四六八？五三五。字は休映、若くして名を知られ、齊に仕えて官は尚書駕部郎(尚書省駕部曹の長官。駕部曹は輿車、牧馬を掌つた。)に至つた。梁に入ると、八たび都督府の長官を歴任し、三たび郡の太守となり、最後の官は度支尚書(尚書省度支曹の長官)。何遜「劉博士江丞朱從事同顧不值作詩云爾」詩に見えた「江丞」。

「孺」劉孺。次の「至大雷聯句」に見える。四八五五四三。字は孝稚、彭城(江蘇省徐州)安上里の人。齊の文人劉繪の兄、劉俊の子。七歳で文章を作ることができた。梁の天監初年、中軍法曹參軍起家し、鎮軍將軍だった沈約に招かれ主簿となり、常に宴席に侍し詩を賦した。都に在つては武帝に詩文の才を愛された。その後、多くの官に任じられ、大同七(五四一)年、吏部尚書となったが、母の死去によつて職を辞し、服喪が終わらない内に健康を害して卒した。何遜との聯句二首が伝わるのみ。

1 弊履常決踵 2 眉高起半額

「弊履」ボロボロのくつ。傳玄「牆上難為趨」に「貧主履弊履、整比藍縷衣(貧主 弊履を履き、藍縷の衣を整比す)」。『決踵』踵が露わになる。極貧の生活をいう。『莊子』讓王に「曾子居衛、緇袍無表、顔色腫皃、手足胼胝。三日不舉火、十年不製衣、正冠而纓絶、捉衿而肘見、

納履而踵決。(曾子 衛に居り、緇袍 表無く、顔色腫皃し、手足 胼胝す。三日 火を挙げず、十年衣を製たず、冠を正して纓 絶え、衿を捉りて肘見はれ、履を納れて踵 決す。)と見える故事に拠る。『眉高』眉を太く描く。都で流行の女性のファッション。『後漢書』馬廖伝に「長安語曰、『城中好高髻、四方高一尺。城中好広眉、四方且半額』。(長安の語に曰く、『城中 高き髻を好むや、四方 高きこと一尺。城中 広き眉を好むや、四方 且に額に半ばならんとす。』)」。『半額』ひたいに半ばするほど眉を太く描く。都の流行が度を過ごした形で地方に伝わることをいう。吳均「与柳惔相贈答」詩六首其二(『玉台』六)に「纖腰曳広袖、半額画長蛾(纖腰 広袖を曳き、半額 長蛾を画く)」。

3 曼倩爾何為 4 独歎長安索

「曼倩」東方朔(前一五四〇九三)の字。武帝に仕え、諧謔滑稽を能くした。『爾何為』おまえはいったいどうしてのか。左に引く『漢書』東方朔伝の記事を踏まえる。陸機「挽歌」詩三首其二に「螻蟻爾何怨、螻蟻我何親(螻蟻 爾は何をか怨みん、螻蟻 我は何ぞ親しまん)」。『独歎』嘆き悲しんでばかりいる。何遜「秋夕仰贈從兄寘南」詩に「撫弦乏歡娛、臨觴独歎嗟」とあった。『長安索』都長安で宮中に仕え給料をもらう。『漢書』東

方朔伝に「久之、朔給驕儒、曰、『上以若曹無益於県官、耕田力作固不及人、臨衆処官不能治民、従軍撃虜不任兵事、無益於国用、徒索衣食、今欲尽殺若曹』。硃儒大恐、啼泣。朔教曰、『上即過、叩頭請罪』。居有頃、聞上過、硃儒皆号泣頓首。上問、『何為』。対曰、『東方朔言上欲尽誅臣等』。上知朔多端、召問朔、『何恐硃儒為』。対曰、『臣朔生亦言、死亦言。硃儒長三尺余、奉一囊粟、錢二百四十。臣朔長九尺余、亦奉一囊粟、錢二百四十。硃儒飽欲死、臣朔飢欲死。臣言可用、幸異其礼。不可用、罷之、無令但索長安米』。上大笑、因使待詔金马門、稍得親近。（之れを久しくして、朔驕の硃儒を給りて、曰く、『上以へらく若曹 県官に益無く、田を耕し力作するも固より人に及ばず、衆に臨み官に処るも民を治むる能はず、軍に従ひ虜を撃つも兵事に任へず、国用に益無く、徒らに衣食を索むと、今 尽く若曹を殺さんと欲す』と。硃儒 大いに恐れ、啼泣す。朔 教へて曰く、『上 即し過ぐれば、叩頭して罪を請へ』と。居ること頃く有りて、上の過ぐるを聞き、硃儒 皆な号泣して頓首す。上 問ふ、『何をか為す』と。対へて曰く、『東方朔 上の尽く臣等を誅せんと欲すと言ふ』と。上 朔の多端なるを知り、召して朔に問ふ、『何ぞ硃儒を恐れしむる』と。対へて曰く、『臣朔 生くるも亦た言ひ、死するも亦た言はん。硃儒 長 三尺余、一囊の粟、錢二百四十を奉ず。臣朔 長 九尺余、亦た一囊の粟、錢二百四十を

奉ず。硃儒は飽きて死せんと欲し、臣朔は飢えて死せんと欲す。臣の言 用ふべくんば、幸ひに其の礼を異にせよ。用ふべからずんば、之れを罷めしめ、但だ長安の米を索めしむる無かれ』と。上 大いに笑ひ、因りて詔を金马門に待たしめ、稍く親近を得たり。』と見える故事に拠る。

5 工商既慙巧 6 農士聊相易

「工商」職人と商人。『管子』小匡に「管子対曰、『士農工商四民者、国之石民也』。（管子 対へて曰く、『士農工商の四民は、国の石民なり』と。）」と見える。また、謝朓「賦貧民田」詩に「敦本抑工商、均業省兼并（本を敦くして工商を抑へ、業を均しくして兼并を省く）」。

「既く聊…」であるからには、取り敢えず…ということになる。庾肩吾「看放市」詩に「既非随舞鶴、聊思索枯魚（既に舞鶴に随ふに非ざれば、聊か枯魚を索せんことを思ふ）」。

「慙巧」小器用さを氣恥ずかしく思う。六朝詩には他の用例は見当たらない。

「農士」農民と士。「士」は為政者の側に在って、生産に携わることのない人々。任昉「為范尚書讓吏部封侯第一表」に「臣本自諸生、家承素業、門無富貴、易農而仕。（臣 本諸生よりし、家 素業を承け、門に富貴無く、農に易へて仕ふ。）」とあり、李善注は東方朔の「戒

子書」を引いて「飽食安歩、以仕易農。（飽食安歩、仕を以て農に易ふ。）」とする。

「相易」ここは農民をやめて仕官する。右を参照。

7 蠲腹有余資 8 鴻肩方可拍

「蠲腹」モグラのお腹。ほんの僅かな量でいっぱいになつてしまふ腹をいう。『莊子』逍遙遊に「偃鼠飲河、不過滿腹。（偃鼠 河に飲むも、滿腹に過ぎず。）」と見えるのに拠る。「偃」は鼫の古字、「蠲」に通じる。

「余資」ありあまるほどの財物。王粲「從軍」詩五首其一に「徒行兼乘還、空出有余資（徒行するも乗を兼ねて還り、空しく出づるも余資有り）」。

「鴻肩」洪涯の肩。「鴻」、鴻涯のこと。洪涯、洪崖とも。三皇の頃の仙人の名。郭璞「遊仙」詩十九首其三（『文選』二十一）に「左挹浮丘袖、右拍洪崖肩（左に浮丘の袖を挹ぎ、右に洪崖の肩を拍つ）」とあるのに拠る。李善注は張衡「西京賦」に「洪涯立而指麾、被毛羽之織襪。（洪涯 立ちて指麾し、毛羽の織襪なるを被る。）」とあるのを引き、また『神仙伝』衛叔卿を引いて「衛叔卿与数人博、其子度曰、『向与博者為誰』。叔卿曰、『是洪崖先生』。（衛叔卿 数人と博し、其の子 度曰く、『向与に博する者 誰と為す』と。叔卿 曰く、『是れ洪崖先生なり』と。）」（『神仙伝』「度」字下有「世」とする。

「方可拍」ちようど今は手で軽くたたくことができる。

9 撰職媿握蘭 10 濫官悲執戟

「撰職」官職を兼務する。また官職に就くことを謙遜している。『晋書』山濤伝に「便当撰職、令断章表也。（便ち当に職を撰し、章表を断たしむべきなり。）」とあり、梁・周興嗣「千字文」に「学優登仕、撰職從政。（学びて優なれば登仕し、職を撰して政に従ふ。）」と見える。「下直出谿边望答虞丹徒教」詩に「伊余忝撰官」とあつた「撰官」と同じような意味だろう。

「握蘭」天子の側近になる。漢・応劭『漢官儀』（『太平御覽』二百十五）に「尚書郎」握蘭含香、趨走丹墀奏事。（蘭を握りて香を含み、丹墀を趨走して事を奏す。）」と見えるのに拠る。呉均「結客少年場」に「握蘭登建礼、拖玉入含暉（蘭を握りて建礼に登り、玉を拖き入りて暉を含む）」。

「濫官」後に惡徳官僚の意で用いられるようになるが、ここは文意から官に就くことを謙遜するというと解した。劉孝綽「酬陸長史倕」詩に「曰余濫官守、因之忝廬九（曰に余 官守を濫り、之れに因りて廬九を忝る。）」。「執戟」官廷の護衛官。東方朔「答客難」（『文選』四十五）「然悉力尽忠、以事聖帝、曠日持久、積数十年、官不過侍郎、位不過執戟。（然れども力を悉くし忠を尽く

して、以て聖帝に事ふるも、曠日持久にして、数十年を積み、官は侍郎に過ぎず、位は執戟に過ぎず。」とあり、李善注は『史記』淮陰侯列伝に「韓信謝曰、『臣事項王、官不過郎中、位不過執戟。』」（韓信 謝して曰く、『臣 項王に事ふるも、官は郎中に過ぎず、位は執戟に過ぎず。』）」とあるのを引く。詩では謝靈運「齋中読書」詩に「執戟亦以疲、耕稼豈云樂（戟を執るも亦た以て疲れ、耕稼 豈に云に樂しからんや）」。

11 連章既不敏 12 高談豈能劇

「連章」前の詩句に続ける。後の例になるが、江総「宴樂修堂応令」詩に「庸疎濫応阮、袁朽惡連章（庸疎 応・阮を濫し、袁朽 連章を惡づ）」、隋・袁慶「奉和御製月夜觀星示百僚」詩に「無庸徒抱寂、何以繼連章（無庸 徒らに寂を抱き、何を以てか連章に繼がん）」とあるように、応令詩や奉和詩に現れる。

「既く豈く」くであるからにはどうしてくであろうか。謝靈運「七里瀨」詩（『文選』二十六）「既秉上皇心、豈屑末代諄（既に上皇の心を秉れば、豈に末代の諄りを屑みんや）」。

「不敏」賢くない。謙遜の語。『論語』顔淵に「回雖不敏、請事斯語矣。（回 不敏と雖も、請ふ斯の語を事とせん。）」とあり、嵇康「幽憤」詩（『文選』二十三）に「日余不敏、好善聞人（日に余 敏からず、善を好みて人に聞し）」とあり、李善注は『孝経』開宗明義に

「參不敏、何足以知之。（參 敏からず、何ぞ以て之れを知るに足らん。）」とあるのを引く。六朝詩の用例は少ない。

「高談」知的で品のある議論。陸機「擬今日良宴会」詩（『文選』三十）に「高談一何綺、蔚若朝霞爛（高談 一に何ぞ綺しき、蔚たること朝霞の爛やかなるが若し）」とあり、謝朓「始之宣城郡」詩に「下帷闕章句、高談媿名理（帷を下ろすも章句を闕き、高談 名理に媿づ）」。

「能劇」流暢に喋ることができる。左思「蜀都賦」に「劇談戲論、扼腕抵紙掌。（劇談し戲論し、腕を扼し掌を抵つ。）」とあり、劉逵注は『漢書』揚雄伝上に「口吃不能劇談、默而好深湛之思。（口 吃にして劇談する能はず、黙して深湛を之れ思ふを好む。）」とあるのを引く。顔師古注に「劇亦疾也。（劇も亦た疾なり。）」。

13 逸翮任奮飛 14 窘步事羈勒

「逸翮」素速く空を飛ぶ鳥。范雲「古意贈王中書」詩に「逸翮凌北海、搏飛出南皮（逸翮 北海を凌ぎ、搏飛して南皮より出づ）」とあり、李善注は郭璞「遊仙」詩十九首其五（『文選』二十一）に「逸翮思抃霄、迅足羨遠遊（逸翮 霄を抃ふを思ひ、迅足 遠遊を羨む）」とあるのを引く。

「奮飛」翼をふるって空高く飛ぶ。何遜「仰贈從兄興寧寔南」詩「何由綏奮飛」【語釈】参照。

「窘步」素速く歩く。ここは駿馬をいう。顔延之「和謝

監靈運」詩に「弱植慕端操、窘步懼先迷（弱植 端操を慕ひ、窘步 先んじて迷ふを懼る）」とあり、李善注は「楚辭」離騷に「何桀紂之猖披兮、夫唯捷徑以窘步（何ぞ桀紂の猖披なる、夫れ唯だ捷徑 以て窘歩せり）」とあるのを引く。王逸注に「窘、急也。」

「羈勒」馬の面懸。転じて拘束されることをいう。謝靈運「擬魏太子鄴中集詩」八首・陳琳に「單民易周章、窘身就羈勒（單民 周章し易く、身を窘しめて羈勒に就く）」と。二句、何ものにも束縛されない自由な生き方を鳥によって、宮仕えの息苦しさを馬によって表現する。

15 還鳥余能繫 16 流言爾無惑

「還鳥」日暮れ時、埒にかえる鳥。陶淵明「歸去來兮辭」（『文選』四十五）に「雲無心以出岫、鳥倦飛而知還（雲は無心にして以て岫を出で、鳥は飛ぶに倦みて還るを知る）」とある。梁・朱超「別席中兵」詩に「急風亂還鳥、輕寒靜暮蟬（急風 還鳥を亂し、輕寒 暮蟬静なり）」とあるが、六朝詩の用例は少ない。

「能繫」出仕しないでいられる。『論語』陽貨に「吾豈匏瓜也哉。焉能繫而不食。（吾 豈に匏瓜ならんや。焉くんぞ能く繫りて食はれざらんや。）」とあるのに基づく。「流言」根も葉もない言葉。また、それを広めること。

『詩経』大雅・蕩に「流言以對、寇攘式內（流言 以

て對し、寇攘 式て内る）」と見え、丘遲「与陳伯之書」に「直以不能內審諸己、外受流言、沈迷猖獗、以至於此。（直だ内に諸れを己に審らかにする能はず、外に流言を受くるを以て、沈迷し猖獗して、以て此に至る。）」とあり、李善注は『尚書』金縢に「武王既喪、管叔及其群弟乃流言於國。（武王 既に喪し、管叔及び其の群弟 乃ち國に流言す。）」とあるのを引く。「無惑」判断に迷わないでいたきたい。六朝詩には他の用例は見当たらない。

17 憂懷乃千載 18 永懷常數刻

「憂懷」心配で悲しい思い。曹植「棄婦」詩（『玉台』二）。『古詩紀』二十三作「棄婦篇」に「憂懷從中來、歎息通鷄鳴（憂懷 中より來たり、歎息 鷄鳴に通ず）。」「千載」千年の間。長い時間をいう。阮籍「詠懷」詩八十二首其二（『文選』二十三）に「猗靡情歡愛、千載不相忘（猗靡として情は歡愛し、千載 相ひ忘れず）。」「永懷」前後から詠歎に同じだろうと解したが、この意味での用例は六朝詩には見当たらない。『尚書』舜典に「詩言志、歌永言。（詩は志を言ひ、歌は言を永くす。）」と見える。ここはこの聯句の場に加わることをいうだろう。

「數刻」短い時間をいう。劉琨「答盧諶詩書」（『文選』二十五）に「時復相与拳觴、对膝破涕為笑、排終身之積慘、求數刻之暫歡。（時に復た相ひ与に 觴を挙げ、

膝を対し涕なみだを破りて笑ひと為し、終身の積慘を排し、数刻の暫歛を求む。」とあり、李善注は「刻、漏也。」として『説文解字』十一篇上・水部に「漏、以銅受水、刻節。昼夜百刻。(漏、銅を以て水を受け、節を刻む。昼夜百刻。)(李善注、「銅」字下有「盆」字、「刻節」作「分時」とあるのを引く。

19 直是悲別離 20 非閑念通塞

「直是く非…」ただであるだけで…ではない。北斉・蕭慤「屏風」詩に「非閑重遊予、直是愛長齡(非閑重ねて遊予するに閑するに非ず、直だ是れ長齡を愛するのみ)」と「非く直是…」の用例が見える他には六朝詩の用例は見当たらないが、何遜には「秋夕歎白髮」詩に「直是安被褐、非敢慕懷珠」と「直是く非」の用例がある。

「悲別離」別れを悲しむ。阮籍「詠懷」詩八十二首其七『文選』一十三に「願覩卒歛好、不見悲別離(願はくは歛好を卒ふるを覩て、別離を悲しむを見ざらんことを)」。

「非閑」くのせいではない。詩に多く現れるのは梁代以降のようである。梁簡文帝「梁塵」詩『玉台』十に「定為歌聲起、非閑團扇風(定めて歌聲の為に起こるならん、団扇の風に閑するに非ず)」。

「通塞」順境と逆境。潘岳「閑居賦」に「雖通塞有遇、抑亦拙者之効也。(通塞に遇有りと雖も、抑亦拙者之効也。)

「茂陵北」漢武帝の陵墓。陝西省興平市。長安の西にあった。ここは都のイメージで用い、建康の北、劉孺の故郷である彭城(江蘇省徐州)を指すと解した。

「至大雷聯句」

【本文及び書き下し】

- | | | |
|----------|-------|-------------|
| 1 高談会良夕 | 高談 | 良夕に会まり |
| 2 滿酒對羈情 | 滿酒 | 羈情に對す |
| 3 閑閑風煙動 | 閑閑 | 閑閑として風煙 動き |
| 4 蕭蕭江雨聲 | 蕭蕭 | 江雨の聲 |
| 5 密雲窮浦暗 | 密雲 | 窮浦 暗く |
| 6 飛電遠洲明 | 飛電 | 遠洲 明らかなり |
| 7 若非今宴適 | 若非 | 今宴に適ふに非ずんば |
| 8 詎使客愁輕 | 詎 | 客愁をして輕からしめん |
| 9 遙舟似連雁 | 遙舟 | 連雁に似 |
| 10 遠火若迴星 | 遠火 | 迴星の若し |
| 11 江潭望如此 | 江潭 | 望むこと 此くの如し |
| 12 銜厄共君傾 | 厄を銜みて | 君と共に傾けん |
- 恒季珪 劉孺

【日本語訳】

- 1 このすばらしい夕に集い、知的な議論を交わしつつ
 - 2 酒をなみなみと酌んだ杯を手に、旅先で生じる様々な
 - 3 風にたなびく霧が生じてだんだんと薄暗くなり
 - 4 雨が川面を打つ音がもの寂しく響きます
- (遜)

なる者の効しるしなり。)」とあり、李善注は『易』節卦象伝に「不出戸庭、知通塞也。(戸庭を出でざるは、通塞を知るなり。)」とあるのを引く。六朝詩の用例は多くない。

21 日照汀沙素 22 山影波浪黑

「日照」日の光が当たる。何遜「折花聯句」「日照爛成綺」

【語釈】参照。

「汀沙」水際の砂。六朝詩には他の用例は見当たらない。「山影」水面に映る山の影。劉孝綽「月半夜泊鵲尾」詩に「月光随浪動、山影逐波流(月光 浪に随ひて動き、山影 波を逐ひて流る)」。

「波浪」波。六朝詩では何遜以前の用例は見当たらない。

23 爾限大江南 24 余帰茂陵北

「限」隔てられる。司馬相如「子虛賦」に「緣以大江、限以巫山。(緣らすに大江を以てし、限るに巫山を以てす。))」。

「大江南」「大江」、長江。『楚辭』九歌・湘君に「望涔陽兮極浦、橫大江兮揚靈。(涔陽の極浦を望み、大江に横たはりて靈を揚ぐ。)」とあり、王粲「七哀」詩三首其二に「方舟泝大江、日暮愁我心(舟を方べて大江を溯り、日 暮れて我が心を愁へしむ)」(泝、『文選』作「溯」。ここは何遜の故郷である僑置の郟県(江蘇省鎮江市)を指すと解した。

5 支流が長江に流れ込む、都から遠く離れた地はみつしりとした雲のために暗くなり
6 遠くに見える中洲はいなびかりのために瞬間明るく浮かび上がります

7 この宴がのびやかに心地よいものでなかったとしたら
8 旅人の愁いをいったいどうやって軽くすればいいのでしょうか

9 遠くの舟は列を作り連れ立って飛ぶカリに似て
10 彼方の漁り火はまるで空を回る星のようです
11 川岸での眺めがこんなにもすばらしいのですから
12 どうかあなたと酒を酌み交わしたいものです(恒季珪)

【校勘】

○『古詩紀』九十四。

5 「窮」、薛本作「重」。

【押韻】

「情」「声」「輕」「傾」、下平十四清韻。「明」、下平十二庚韻。「星」、下平十五青韻。庚・清同用。

【語釈】

0 至大雷聯句

「大雷」地名。安徽省望江県。大雷戍。鮑照に「登大雷岸与妹書」があり、『太平御覽』六十五に『水經』曰、『南經大雷戍西』。注、『大江謂之大雷口、一派東南流

入江、謂之小雷口也」。宋鮑明遠『登大雷岸与妹書』乃此地。『水經』に曰く、『南して大雷戍の西を経』と。注に、『大江、之れを大雷口と謂ひ、一派、東南に流れて江に入る、之れを小雷口と謂ふなり』と。宋鮑明遠の『登大雷岸与妹書』、乃ち此の地なり。」とある。

〔劉孺〕何遜「賦詠聯句」詩題【語釈】参照。

〔桓季珪〕未詳。何遜に「道中贈桓司馬季珪」と題する詩があるので、司馬の官にあつたことは分かる。「桓」が垣の誤りであれば、『梁書』太祖五王伝・始興王蕭憺に「天監九年」、時魏襲巴南、西囲南安、南安太守垣季珪堅壁固守、憺遣軍救之、魏人退走、所収器械甚衆。」とその名が見える。

1 高談会良夕 2 満酒対羈情

〔高談〕知的で品のある議論。何遜「賦詠聯句」「高談豈能劇」【語釈】参照。

〔会〕あつまる。ここは議論に加わるに相応しい人々が集まつた。

〔良夕〕このすばらしい夕。「古詩十九首」其四に「今日良宴会、歡樂難具陳（今日、良宴会、歡樂、具には陳べ難し）」とあるのを意識すると思うが、六朝詩には他の用例は見当たらない。

〔満酒〕杯になみなみと酌んだ酒。六朝詩には他の用例は見当たらない。

〔窮浦〕川が合流する辺鄙なところ。ここは「大雷」のこと。「浦」は大きな川とその支流が合流するところ。六朝詩には他の用例は見当たらない。

〔飛電〕いなびかり。謝靈運「長歌行」に「徂齡速飛電、頽節驚驚湍（徂齡は飛電より速く、頽節は驚湍より驚し）」と見えるが、六朝詩の用例は多くない。

〔遠洲〕遠くに見える中洲。六朝詩には他の用例は見当たらない。

7 若非今宴適 8 詎使客愁輕

〔若非〕もしでなかったとしたら。梁邵陵王蕭綸「代秋胡婦閨怨」詩（『玉台』七）に「若非新有悅、何事久西東（若し新たに悦ぶもの有るに非ずんば、何事ぞ久しく西東するや）」。

〔今宴適〕この宴席がのびのびとして気持ちよい。「今宴」、六朝詩には他の用例は見当たらない。「適」、心地よい。沈約「從齊武帝瑯琊城講武武應詔」詩に「方待翠華舉、遠適瑤池宴（方に翠華の挙がるを待ち、遠く瑤池の宴に適ふ）」。

〔詎使〕ゝに：させない。梁・到溉「答任昉」詩に「仮令金如粟、詎使廉夫貪（仮令し金、粟の如ければ、詎ぞ廉夫をして貪らしめんや）」と見える他はほとんど見当たらない。

〔客愁〕旅先で故郷を思つて生じる悲しみ。六朝詩には他の用例は見当たらない。

〔羈情〕旅にあつて生じる様々な思い。これも六朝詩には他の用例は見当たらない。

3 関関風煙動 4 蕭蕭江雨声

〔関関〕憂える様。また、暗い様。何遜「送韋司馬別」詩「関関分手畢、蕭蕭行帆舉」【語釈】参照。

〔風煙〕風にたなびくもや。また、風ともや。謝朓「和王著作八公山」詩に「風煙四時犯、霜雨朝夜沐（風煙四時に犯し、霜雨、朝夜に沐す）」。

〔蕭蕭〕ここは雨が長江の水面に降るもの寂しげな音。何遜「望廨前水竹答崔録事」詩「蕭蕭叢竹映」【語釈】参照。

〔江雨声〕長江の川面に降る雨の音。「江雨」、六朝詩には他の用例は見当たらない。「雨声」の語も梁代以前の詩には見当たらず、梁元帝「夜宿柏齋」詩（「宿」、「玉台」七作「遊」）に「風細雨声遲、夜短更籌急（風細かくして雨声、遅く、夜、短くして更籌、急なり）」とあるが、「江声」は六朝詩の用例が見当たらない。

5 密雲窮浦暗 6 飛電遠洲明

〔密雲〕濃く厚い雲。曹摅「思友人」詩に「密雲翳陽景、霖潦淹庭除（密雲、陽景を翳ひ、霖潦、庭除を淹す）」とあり、李善注は『易』小畜に「密雲不雨、自我西郊。（密雲、雨ふらず、我が西郊よりす。）」とあるのを引く。

9 遙舟似連雁 10 遠火若迴星

〔遙舟〕遠くに浮かぶ舟。これも六朝詩には他の用例は見当たらない。

〔連雁〕連なつて飛んでいくカリ。馬融「囲碁賦」に「離離馬目兮連連雁行。（離離として馬目のごとく、連連として雁行のごとし。）」と見えるが、やはり六朝詩には用例は見当たらない。

〔遠火〕遠くに見える火。ここは漁り火。「敬酬王明府」詩に「澄江照遠火」と見えたが、六朝詩には他の用例は見当たらない。

〔迴星〕夜空をめぐる星。『詩經』大雅・雲漢に「倬彼雲漢、昭回于天（倬たる彼の雲漢、昭、天に回る）」とあり、沈約「却東西門行」に「馳蓋転徂龍、回星引奔月（馳蓋、徂龍を転じ、回星、奔月を引く）」。

11 江潭望如北 12 衡危共君傾

〔江潭〕川岸。陸機「赴太子洗馬時作」詩（『文選』二十六作「赴洛」二首其一。題下李善注云「集云、『此篇赴太子洗馬時作』。下篇云『東宮作』。而此同云『赴洛』。誤也。（集に云ふ、『此の篇、太子洗馬に赴きし時の作』と。下篇を『東宮の作』と云ひて、此に同に『洛に赴く』と云ふは、誤りなり。）」に「靖端肅有命、仮櫂越江潭（靖端にして有命を肅み、櫂を仮りて江潭を越えんとす）」とあり、李善注は『楚辭』漁父に「屈原

既放、游於江潭、行吟沢畔。(屈原 既に放たれ、江潭に遊び、沢畔に行吟す。)」とあるのを引く。

「望如此」眺望はこのようだ。「望如」であれば徐陵「洛陽道」二首其二に「濯龍望如霧、河橋度似雷(濯龍望めば霧の如く、河橋、度れば雷に似る)」。

「銜卮」酒を酌み交わす。六朝詩には他の用例は見当たらない。「銜杯」であれば何遜「贈韋記室黯別」詩「銜杯誰復同」【語釈】参照。

「共君傾」あなたといっしょに杯を傾けて酒を飲む。梁元帝「烏棲曲」四首其二に「邯鄲九枝朝始成、金卮玉盃共君傾(邯鄲の九枝 朝に始めて成り、金卮 玉盃君と共に傾けん)」。

「臨別聯句」

【本文及び書き下し】

- | | | |
|---------|-----------------------------|---|
| 1 臨別情多緒 | 別るるに臨みて情 緒多 _{こと} く | |
| 2 送歸涕如霰 | 歸るを送りて涕 霰の如し | |
| 3 君望長安城 | 君は長安城を望み | |
| 4 予悲独不見 | 予は独り見ざるを悲しむ | 遜 |
| 5 爾來同去国 | 爾は来たりて同に国を去り | |
| 6 予歸方異県 | 予は歸りて方に県を異にす | |
| 7 懷別心独憂 | 別れを懷きて心 独り憂ひ | |
| 8 手淚方濺濺 | 涙を手にして方に濺 _{せん} 濺たり | 孺 |

【日本語訳】

「臨別我傷悲」【語釈】参照。

1 臨別情多緒 2 送歸涕如霰

「多緒」いろいろな種類がある。任昉「奉答勅示七夕詩啟」(『文選』三十九)に「窃惟帝迹多緒、俯同不一」。(窃かに惟ふに帝迹 緒多_{こと}く、俯同 一ならず。)とあるが、梁代以前の詩には見当たらない。

「送歸」故郷に歸る人を見送る。何遜「往晉陵聯句」「送歸子自適」【語釈】参照。

「涕如霰」霰のようにポロポロこぼれる涙。『楚辭』九章・哀郢に「望長楸而太息兮、涕淫淫其若霰(長楸を望みて太息し、涕 淫淫として其れ霰の若し)」。長楸は高い梓の木。詩では謝朓「晚登三山還望京邑」詩に「佳期悵何許、淚下如流霰(佳期 何許かと悵ひ、涙 下りて流霰の如し)」、江淹「雜體」詩三十首「李都尉陵從軍」に「日暮浮雲滋、握手淚如霰(日暮 浮雲 滋く、手を握れば涙 霰の如し)」(「握」、『文選』作「渥」とあるなど、用例が多い)。

3 君望長安城 4 予悲独不見

「君々予」あなたは々わたしは。何遜「酬范記室雲」詩「高唱子自輕」【語釈】参照。
「長安城」ここは都である健康をいう。沈約「登高望春」詩(『玉台』五)に「廻首望長安、城闕鬱盤桓(首を廻らして長安を望めば、城闕 鬱として盤桓す)」とある

1 お別れの時を控えて様々な思いが浮かび
2 故郷にお歸りになるのを見送ると涙があられるようにポロポロこぼれます

3 あなたは都を遠くから眺めておられ
4 ひとりぼっちのわたしはお会いできないことを悲しむのです (遜)

5 あなたは折角いらっしゃったのに、わたしとともに都を離れることになり

6 わたしは帰郷することにしたので、あなたとは所を異にするようになりました

7 別れの悲しみを胸に懷いて、心の中は思い悩んでばかりいます

8 涙を手で払っても涙はしとどにあふれるのです (孺)

【校勘】

○『古詩紀』九十四。

5 「窮」、薛本作「重」。

【押韻】

「霰」「見」「県」、去声三十二霰韻。「濺」、去声三十三線韻。霰・線同用。

【語釈】

0 臨別聯句

「臨別」もうすぐ別れようという時。何遜「往晉陵聯句」

のはその例。

「独不見」わたしだけが思う人に会うことができない。柳惲に樂府「独不見」(『樂府詩集』七十五)があり、題下注に引く『樂府解題』に「『独不見』、傷思而不得見也。『独不見』、思ふも見るを得ざるを傷むなり。」とある。

5 爾來同去国 6 予歸方異県

「爾々予」あなたは々わたしは。何遜「酬范記室雲」詩「高唱子自輕」【語釈】参照。

「去国」都、また朝廷を離れる。顔延之「和謝監靈運」詩に「去国還故里、幽門樹蓬藜(国を去りて故里に還り、幽門 蓬藜を樹えん)」。

「異県」別々の地に身を置く。蔡邕「飲馬長城窟行」に「仵鄉各異県、展転不相見(仵郷 各おの県を異にし、展転して見るべからず)」。

7 懷別心独憂 8 手淚方濺濺

「懷別」別離の悲しみを心に懷く。六朝詩には他の用例は見当たらない。

「心独憂」たったひとりで思い悩む。「心独」は張華「情詩」五首其二(『玉台』二)に「寤言増長歎、悽然心独悲(寤言 長歎を増し、悽然として心 独り悲しむ)」(「寤」、『玉台』作「寐」)、「独憂」は庾肩吾「經陳思王墓」詩に「公子独憂生、丘壠擅余名(公子 独り生

を憂ひ、丘壠に余名をほしいまま擅にす」。

〔手涙〕涙を手で払う。六朝詩には他の用例は見当たらない。第2句「涕如霰」【語釈】に引いた江淹「雜体」詩に「握手涙如霰」とあった。

〔濺濺〕水の流れの速い様。梁武帝「遊鍾山大愛敬寺」詩に「幽谷響嚶嚶、石瀨鳴濺濺（幽谷 響くこと嚶嚶あうあうとして、石瀨 鳴ること濺濺たり）」とあるが、ここは涙が盛んにこぼれる様をいうだろう。